

タイトル	ワマン・ポマ著女澤史恵訳『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(2) インカ帝国民族資料監修
著者	大場，四千男；OBA, Yoshio
引用	北海学園大学学園論集(147)：1-86
発行日	2011-03-25

ワマン・ポマ著 女澤史恵訳
『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(二)

インカ帝国民族資料監修 大 場 四 千 男

目 次

序 文

第一編 アンデス古代史

第二編 インカ帝国の国王と王妃

第三編 インカ帝国の部将

第四編 インカ帝国の年間行事と儀式

第五編 インカ帝国の宗教と葬式

第六編 インカ帝国の刑罰と祭り

第七編 インカ帝国の行政官と巡察使（以上迄 146 号）

第八編 スペインのインカ帝国征服

第九編 征服後の歴代副王

第十編 征服後の聖職者

第十一編 征服後の立法官・裁判官・書記官

第十二編 植民地化とスペイン人支配者（コレヒドール・エンコメンデーロ）

第十三編 スペイン人支配者（司祭・修道士・巡察使）

第十四編 植民地化と黒人

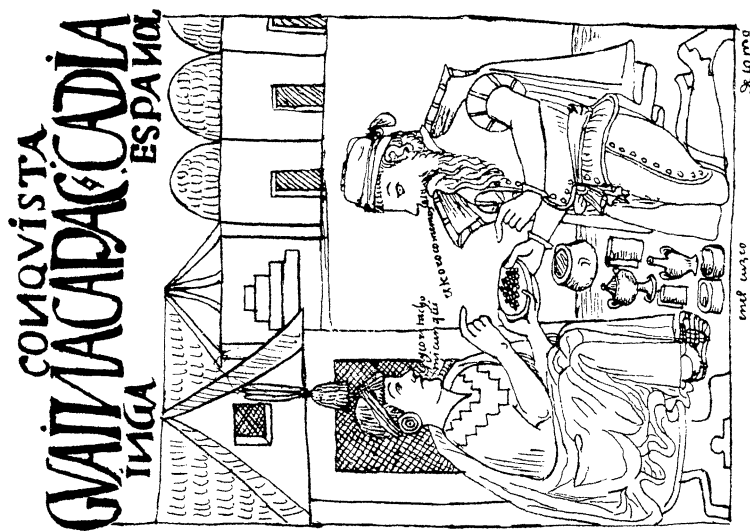
第十五編 インディオの有力者（カシーケ・市長・書記官）

第十六編 キリスト教徒のインディオ

第十七編 植民地体制下のインディオ

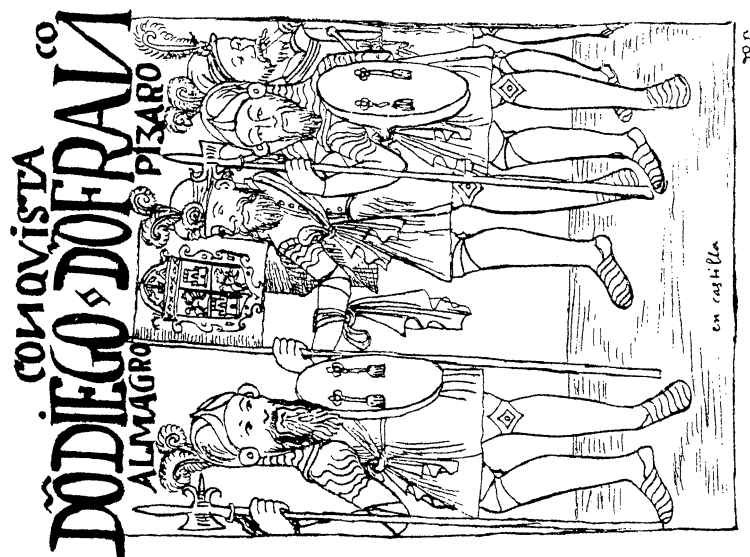
第十八編 考察

第八編 スペインのインカ帝国征服



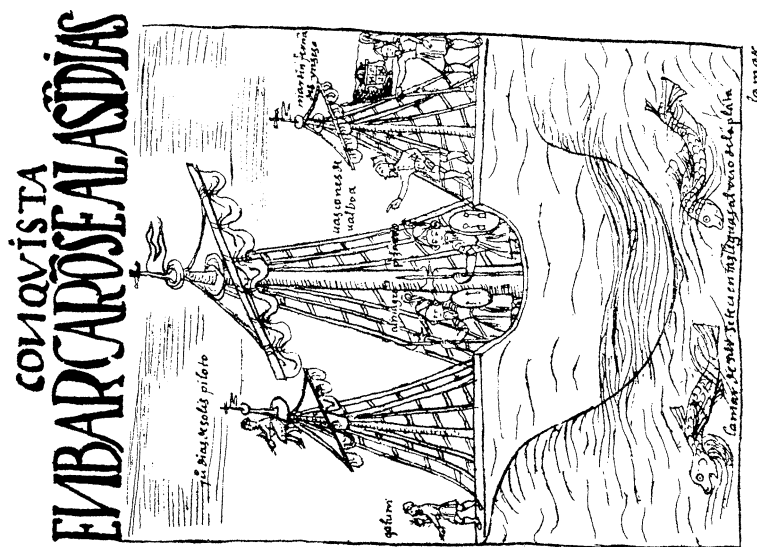
ワイナ・カパック・インカ

ワイナ・カパック・インカはクスコで長い髭をたくわえた男たちが上陸しているという情報を得た。そのスペイン人と会ったときに、身振り手振りでスペイン人に何を食べのかと尋ねると、金や銀を食べると聞かされた。するとインカは金、銀、黄金の装飾品を与え、港町サンタヘ戻るよう命じた。



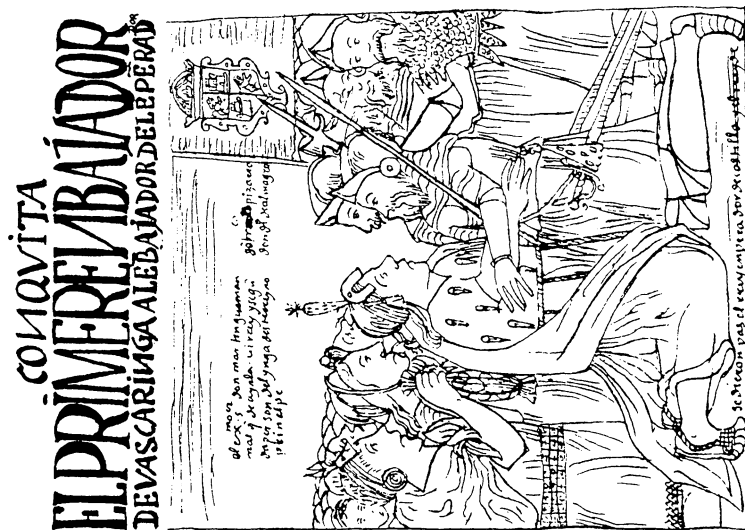
征服

ディエゴ・デ・アルマグロとフランシスコ・ピサロは350人の兵士の指揮官だった。(スペインの)カステイリャでは多くの人々がペルーの金銀を日夜を問わず夢見て、歌にまで、インディアス、金、銀と歌われた。金銀への熱望は止むことなく、衰れたインディオは殺され、インカ帝国の人口が減少した。



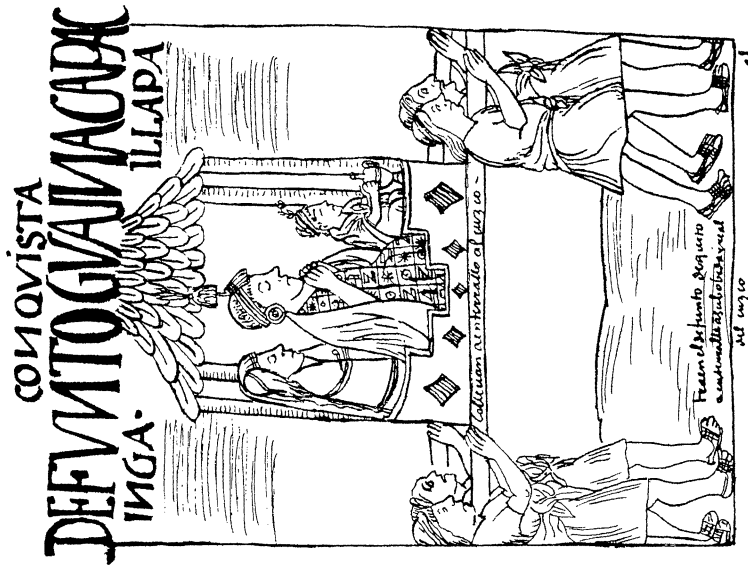
征服

フアン・ディアス・デ・ソリス, マルティン・フェルナンデス, バスコ・ヌニェス・デ・バルボア, コロンブス (クリストバル・コロン) が征服者がインディアスに向けて出航した。休みなく航海を続け、金銀のことしか頭になかった。欲望で理性を失い, ときには食事を忘れるほどだった。指揮官, 司祭, 行政官は金銀への欲望ですっかり落ちぶれていた。



征服

インカ王ワスカルはマルティン・グアマン・マルキをトゥンベスの港に遣わせ, フランシスコ・ピサロとデイエゴ・デ・アルマグロを出迎えた。彼らは互いにひざまずき, 抱き合い, 平和と友好を望んだ。それから, 宴会が催され, このキリスト教徒たちに贈り物をした。



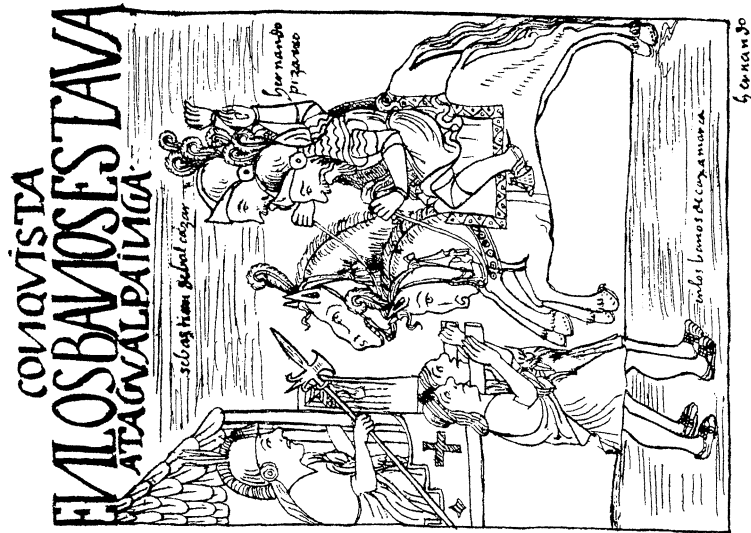
征服

ワイナ・カパックの遺体が埋葬のためキトからクスコへ移送された。多くの人々が王の死を嘆き悲しんだ。この時すでに、兄弟ワスカルとアタワルパとの間で流血の争いの予兆があった。



征服

インカ王アタワルパはデイエゴ・デ・アルマグロとフランシスコ・ピサロに部将ルミニニャワイを遣わせ、女性と贈り物を差し出した。使者はスペイン人に、スペイン本国に帰国するのなら惜しみなく金銀を与えようと言ったが、スペイン人は帰国するつもりはないと言った。



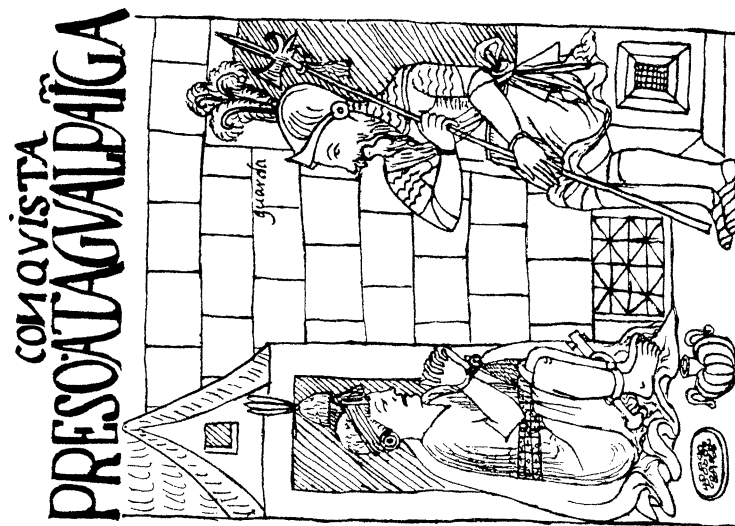
征服

インカ王アタワルパはインカの温泉場にいた。エルナンデス・ピサロとセバスティアン・デ・ベナルカサルはインカ王アタワルパの輿に向かって馬を突進させた。インカ王が転げ落ちるのを見たインディオは驚愕し、馬やこのように武装した人を見たことがなかったので、戦わずして逃げ出した。



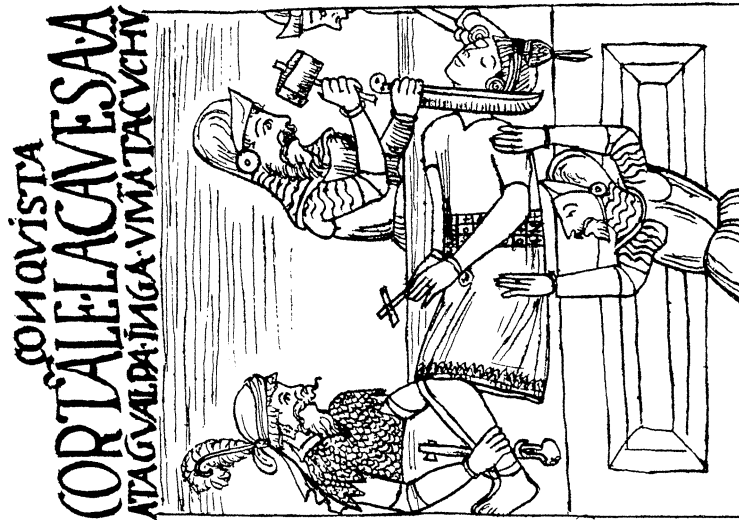
征服

カハマルカの広場で玉座に座っているアタワルパ。フランシスコ・ピサロとデイエゴ・デ・アルマグロはアタワルパ・インカ王に、友好を望んでいるスペイン国王の使者であると説明した。アタワルパは己もまたこの国の偉大な支配者であり、友好を結ぶ必要はないと返答した。そこで修道士ピゼンテが、福音を信じ、十字架を崇めている使者であると述べると、インカ王は己の信仰している宗教と不滅の太陽以外、誰をも崇める必要はないと返した。



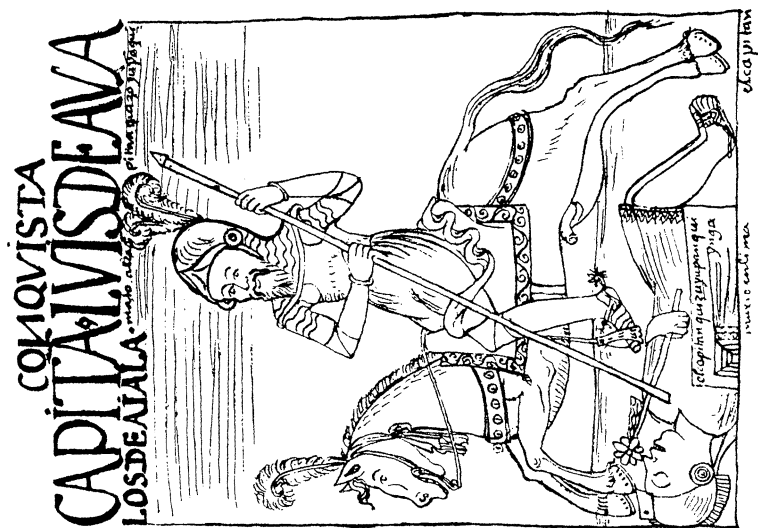
征服

捕えられたアタワルパ。ピサロとアルマグロ、それにスペイン人兵士はアタワルパから全てを奪い去った。太陽神殿の壁、床、窓を覆っていた大量の金銀を略奪した。囚われの身となったアタワルパは、ピサロやアルマグロ、スペイン人兵士と談話し、チェスをした。



征服

アタワルパはカハマルカで斬首刑に処された。フランシスコ・ピサロから斬首刑を宣告された。金銀と引き換えに解放してもらえよう、すでにスペイン人に金銀を供したにもかかわらず、ディエゴ・デ・アルマグロとスペイン人兵士はアタワルパの懇願に耳を貸さなかった。



征服

アバロス・デ・アヤラ指揮官。12名の部将と1000人のインディオを率いた、著者の叔父でもある部将キノ・ユパンキは戦いの最中に泥に足をとられて転び、アバロス・デ・アヤラ指揮官に槍で突かれて殺害された。



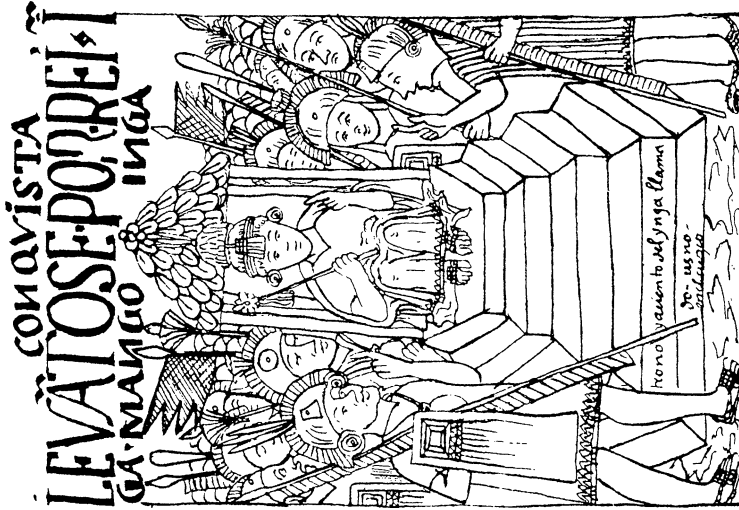
征服

征服者によって持ち込まれた洋服。初期の征服者たちは寒さ対策として、毛糸の帽子、革の上着、びったりしたズボン、マントなどを持ち込んだ。女性たちは長いスカート、マント、ショールを着ていた。



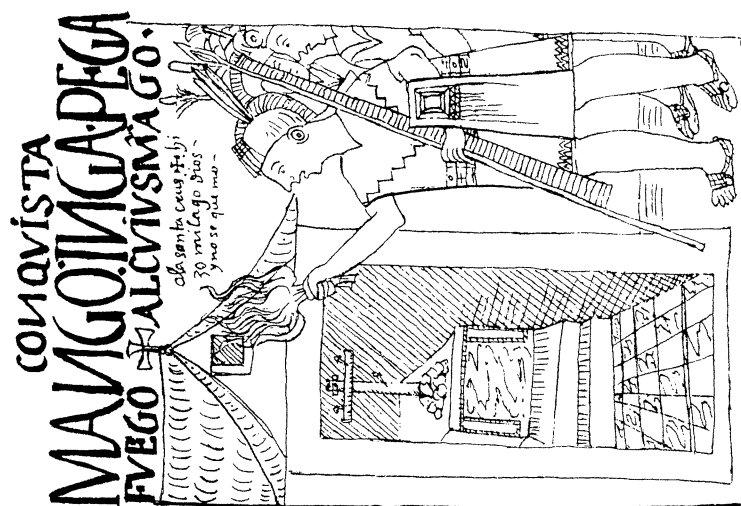
征服

狭い部屋に閉じ込められ焼き殺されるカパック・アボ・グアマン。フランシスコ・ピサロとディエゴ・デ・アルマグロはインカの副官カパック・アボ・グアマンを金銀欲しさに焼き殺した。多くのインカ有力者は黄金のために拷問され、殺されるのはあまりにも惨いと訴えた。



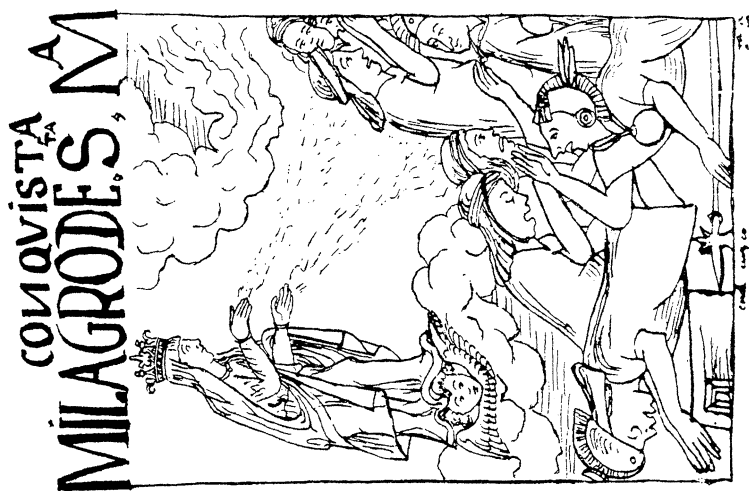
征服

マンコ・インカの反乱。クスコにあるウスノという御席(儀式用広場にある祭壇)。スペイン人のインカや有力者に対する態度や、女性や貧しいインディオへの残虐行為に反発し、マンコ・インカはスペイン人に反旗を翻した。



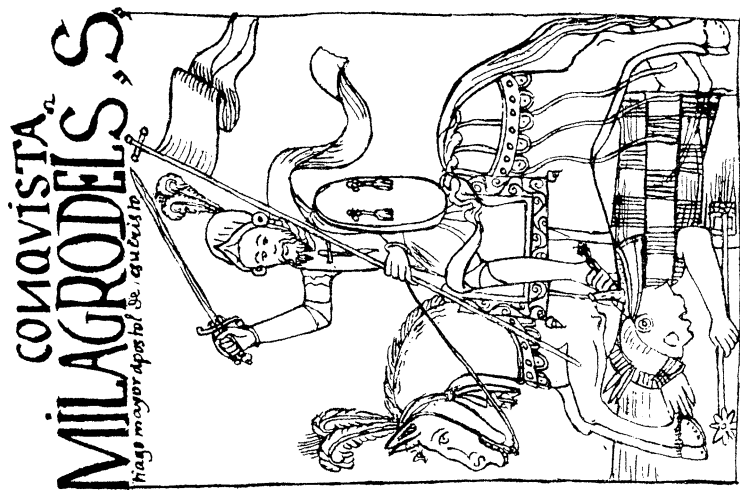
征服

マンコ・カパックは、クスコでキリスト教の神殿になっていたかつてのインカの館に火を放ったが、奇跡が起こった。その館は燃えず、炎は神殿に達しなかった。この王国に聖なる教会がそのまま残ったのは、神の御業の表れだった。



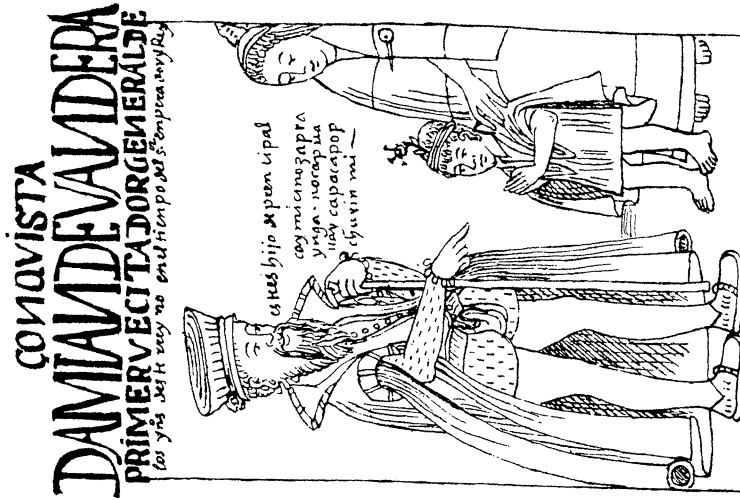
征服

クスコでの聖母マリアの奇跡。神はさらに奇跡を起こした。キリスト教徒は皆クスコの大広場に集まり、神と女神に祈り始めると、太陽のように明るい光の中に女神が現れ、それを見たインディオオは怯えた。女神を通じて、神はインディオオをキリスト教に改宗し、魂を救おうとしたのだ。



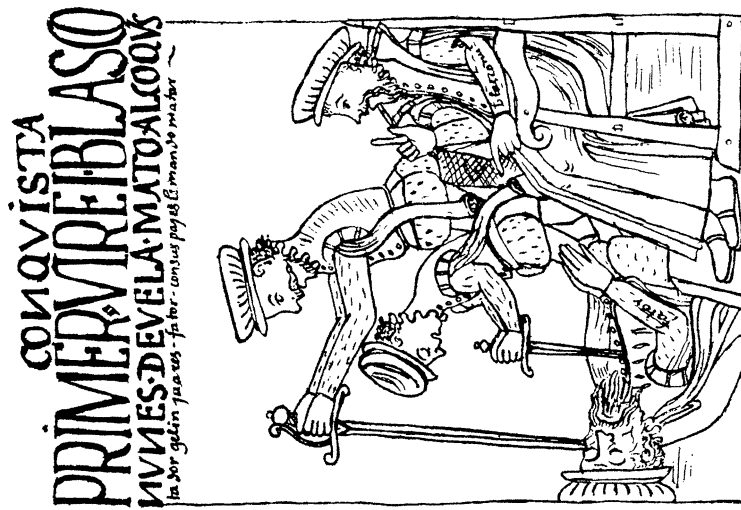
征服

イエス・キリストの12使徒のひとり、聖ヤコブの奇跡。クスコでキリスト教徒が集まって口々に言うには、スペイン人の守護聖人ヤコブが天から稲妻のようにインカの要塞サクワイワマンに降りてくると、インデイオは怖れをなした。キリスト教徒に味方して雷が落ちたらしい。聖ヤコブは白馬に跨って現れ、剣を振りかざして大打撃を与え、マンコ・カパックの建てた堀を破壊したそうさ。



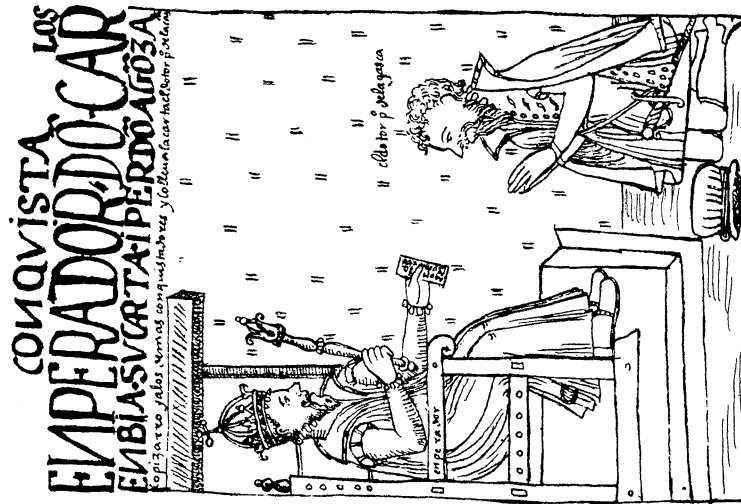
征服

最初の総督がやってきて、インカ皇帝とカステイリーリヤ王ドン・カルロスによって統治されることになった。「この方は偉大なる王の息子である」と巡察使が言っている。



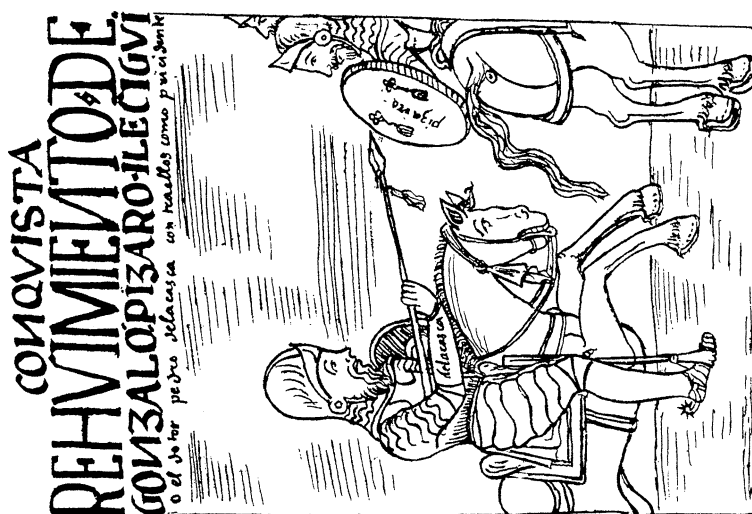
征服

初代副王ブラスコ・スニエス・ペラは忠実な部下の助けで、征服者ゲーレン・スアレスを殺害した。秩序の回復と、新法の施行のためにスペイン国王から派遣された初代副王ペラは、ゴンサロ・ピサロとの戦いで敗北し、斬首の刑に処された。



征服

スペイン国王ドン・カルロスはゴンサロ・ピサロら征服者たちに送る書簡を、ペドロ・デ・ラ・ガスカに託す。そこには、新法やその他の法に今後従わなければ、謀反者として地位を剥奪すると書かれている。

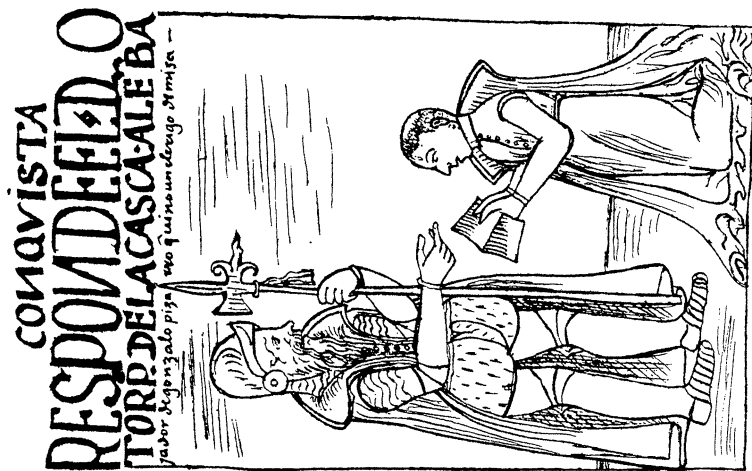


征服

ピサロ・デ・ラ・ガスカはゴンサロ・ピサロを追跡する。王軍は1500人の歩兵、2200人の騎馬兵、150人の火繩銃兵で構成されていた。ゴンサロ・ピサロ軍は300人の火繩銃兵と80人の騎馬兵、500人の歩兵だった。ペドロ・デ・ラ・ガスカの150人の砲兵隊はピサロの前線を突破し、ピサロは逃走した。この王国で起きた最も有名なキリスト教徒間の戦闘だった。

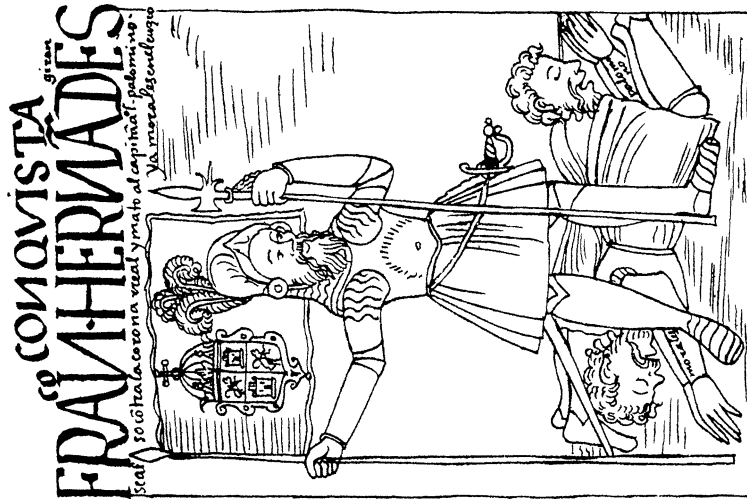
征服

ゴンサロ・ピサロはリマでカンパハル部将を丁重に歓迎した。カンパハル部将は1500人の兵と300人の火縄銃兵、それと40万エスクード相当の金銭を携え、ピサロを擁護するためにやってきた。ゴンサロ・ピサロの反乱を抑えるためにスペイン国王から派遣されたペドロ・デ・ラ・ガスカと対戦するためである。



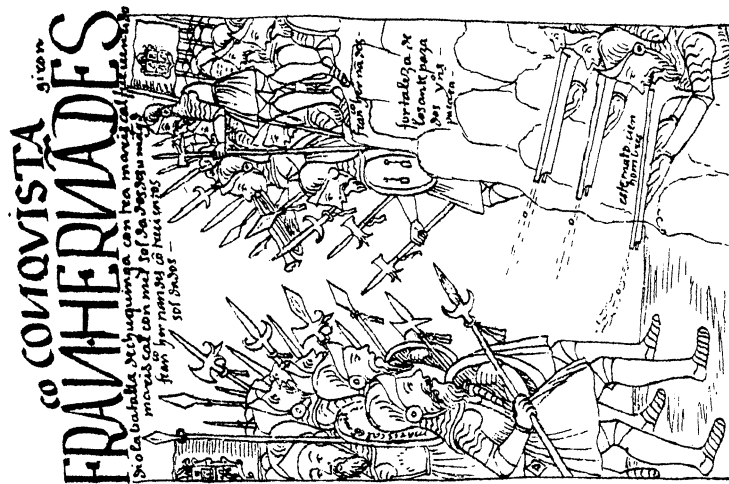
征服

戦闘を避けるため遣わされたゴンサロ・ピサロの使者である聖職者に答えるペドロ・デ・ラ・ガスカ。しかしラ・ガスカは、その願いは聞き入れられないと答えた。翌日、ゴンサロ・ピサロは死刑を宣告され、首をはねられ、頭部はリマへ送られた。ラ・ガスカからはカルバハルも捕え、9人の部将を絞首刑にした。



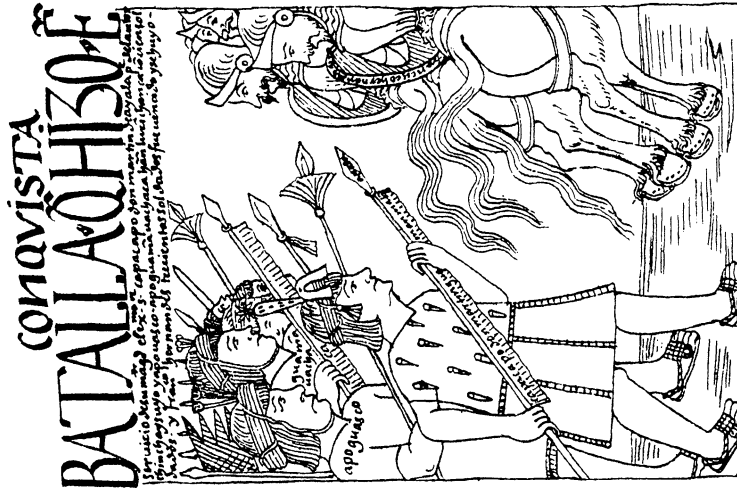
征服

フランシスコ・エルナンデス・ヒロンはスペイン王室に反発し、部将アロンソ・パロミノとモラレスをクスカコで殺害した。ドン・カルロス王を支持する著名な二人、バルタサル・デ・カステイラとジョアン・デ・カセレスがいることを知っていた。フランシスコ・エルナンデス・ヒロンは二人の首をはねた。



征服

フランシスコ・エルナンデス・ヒロンは、スペイン国王カルロスの元帥アロンソ・デ・アルバラドの率いる軍と対戦し、チュキングの戦いとなった。王軍は多数の兵を失い、フランシスコ・エルナンデス軍は50人の死者を出した。王軍の元帥は、兵士と部将を引き連れて逃走せざるを得なかった。



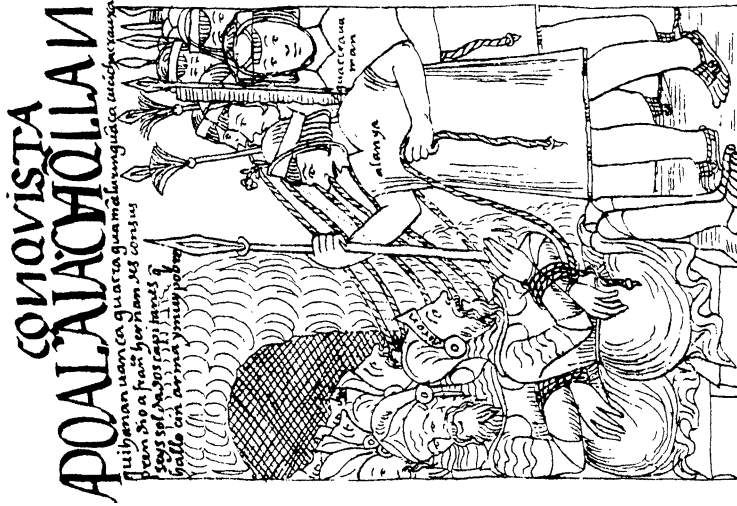
征服

カルロス皇帝の味方に付いて、カパック・マルティン・グアマン・デ・アヤラが参戦した。100人のインディオ兵を引き連れ、裏切り者フランシスコ・エルナンデス・ヒロンが率いる300人のスペイン人と、100人のメステイソとムラートからなる部隊と対戦し、ヒロンが敗れ、六人の部将を引き連れ撤退した。



最初の良き統治者と裁判官

アントニオ・デ・メンドーサは紳士的で、聖ヤコブの信奉者。第2代副王となった。70歳。敬虔なキリスト教徒で貧しい人々の味方で、神と王に忠誠だった。高齢にもかかわらず、征服者(コンキスタドール)を恐れず、必要とあらば罰した。



征服

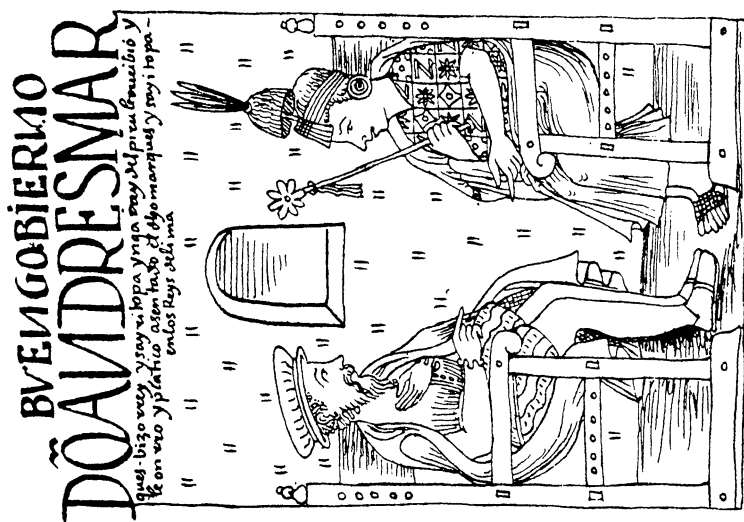
アポ・チュキらはフランシスコ・エルナンデス・ヒロンと六人の兵を探し回った。彼らは武器を持っておらず、服も着ていなかった。彼らはヒロンらをハウハ谷のワンカ族の人たちに引き渡した。ヒロンらはリマへ連れて行かれ、裏切った罰としてエルナンデス・ヒロンは首をはねられ、他の人たちは絞首刑や四つ裂きの刑にされた。こうしてスペイン王室に対する反乱は鎮圧され、征服者たちの独立気運は潰えた。

第九編 征服後の歴代副王



良き統治

大司教ドン・ホワン・ソラノのもとで、ドン・クリストバル・サイリ・トパとドナ・ペアトリス・コヤが結婚した。二人は兄弟で、マンコ・インカと彼の母親の子どもである。



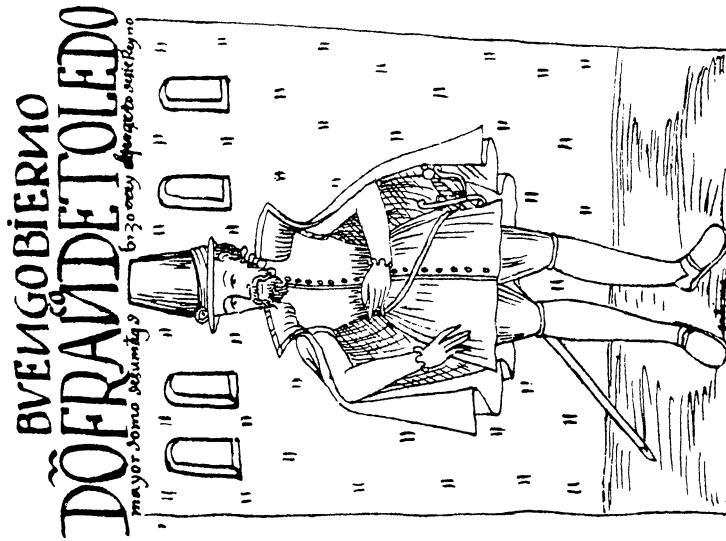
良き統治

第3代副王カニエテ侯は敬虔なキリスト教徒で、平和に統治した。マンコ・インカカの正式な息子サイリ・トゥパック・インカは、副王カニエテが友好的な人物であることを知り、潜伏していたビルカバンバから部将と帰順した。副王カニエテ侯とサイリ・トゥパックが会談し、友好関係を築こうとしている。



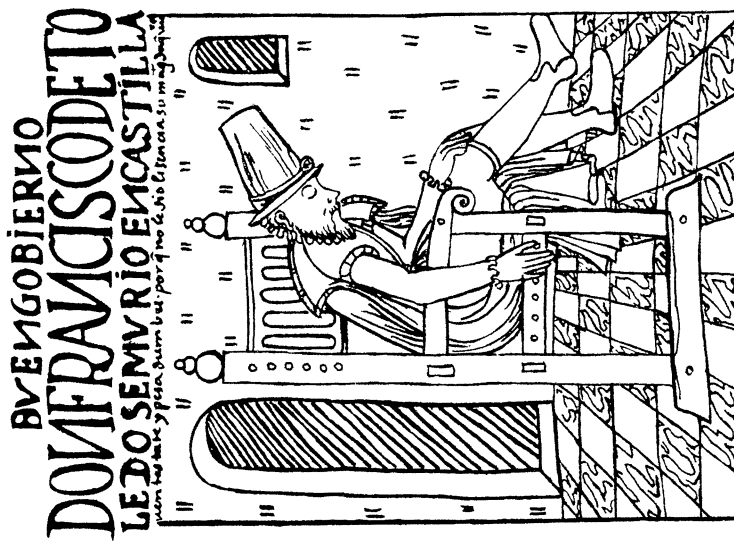
良き統治

トウパバック・アマル・インカがクスコで部将マーティン・ガルシア・デ・オヨラに捕えられた。副王フランシスコ・トレドはトウパバック・アマル・インカを捕えるために部将を送り込んだ。王徴の房飾りをのせた裸足のトウパバック・アマル・インカを黄金の鎖につないで連行する部将の手には、2つの偶像、太陽神と守護神がのせられている。



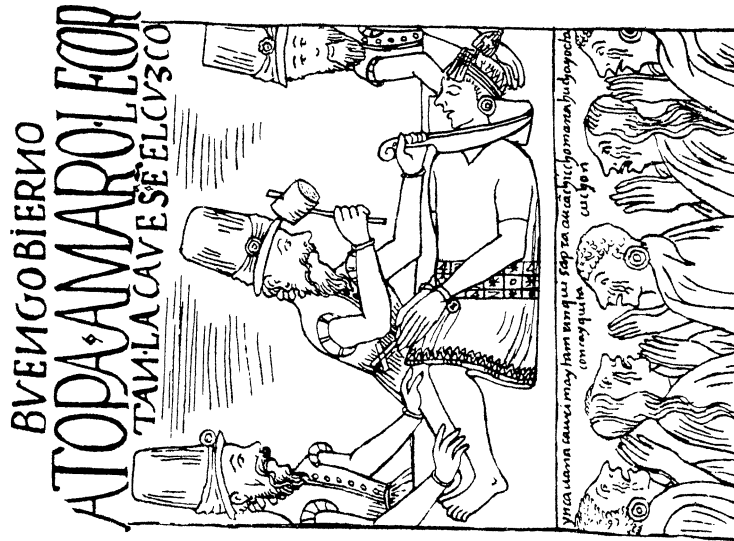
良き統治

スペイン国王フェリペ2世の時代に、第4代副王フランシスコ・トレドは各州の巡察使を任命した。巡察使は行政官や司祭と一緒に、インディオから土地、地位、家、畑、牧草地、女を奪った。12人以上の子どものいる聖職者までいたが、解決策はなかった。



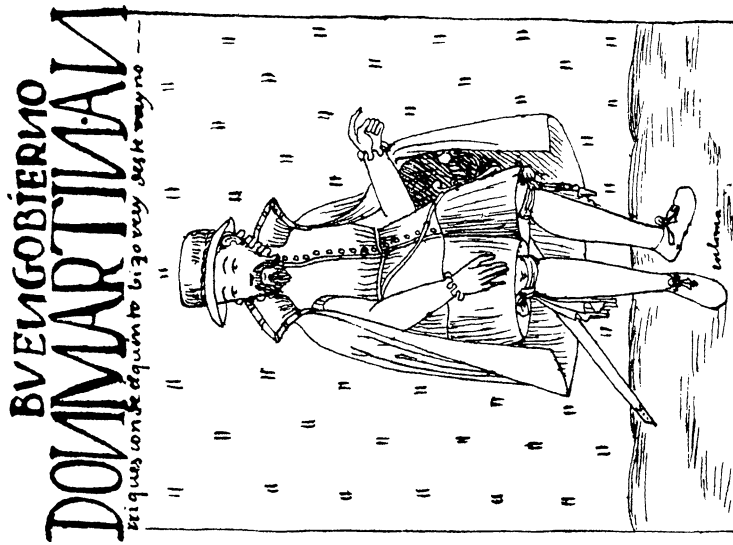
良き統治

フランシスコ・トレドは失脚させられ、カステイリャに戻る。トレドはスペイン国王フィリップ2世との面会を求めたが、国王に断られ、これらの出来事から病氣になり亡くなった。インカやインディオの有力者に対して行った数々の悪事のせいである。傲慢で横柄な振る舞いの果てに、フランシスコ・トレドは他界した。



良き統治

トゥパク・アマルはフランシスコ・トレドの命令で、斬首刑となった。トゥパク・アマルは洗礼を受け、十五歳で亡くなった。インディオの有力者の女性たちは涙を流した。クスコの教会には葬儀に参列するため、指導者全員が集まった。どうして副王トレドは死刑を宣告できるのか？ 副王は国王より権力があるのか。



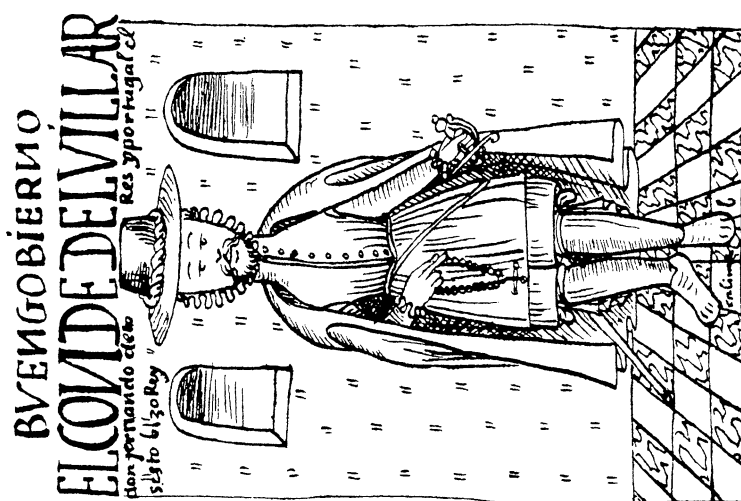
良き統治

第5代副王マルティン・エンリケスはインディオやカシーケ、征服者、兵を侵害することなく、多くの法を導入し、キリスト教の作法で統治した。チリの征服に大きく貢献し、必要な船隊をつくりあげた。



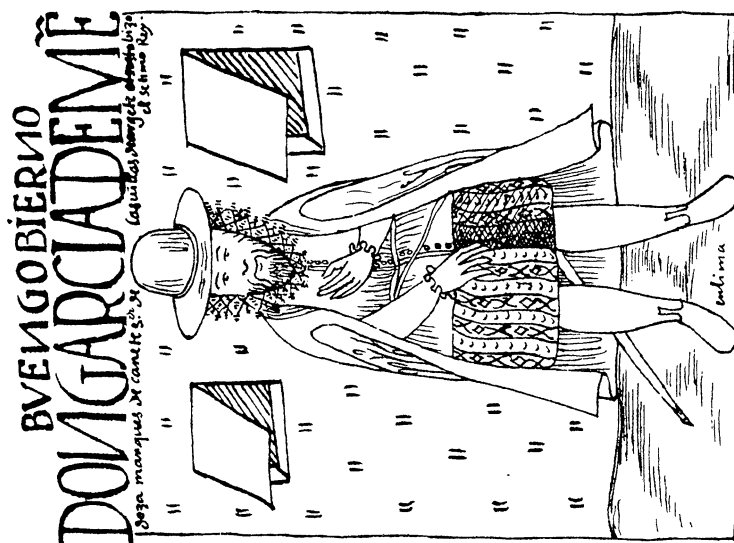
良き統治

マルティン・デ・アルビエトとドン・トマス・トパ・インカは結束して、山奥にいたインディオを征服しようとした。著者の弟、マルティン・デ・アヤラはこの紛争に参加し、森林地帯から病氣になって戻って来た。その後アヤラはクスコの病院で働いた。



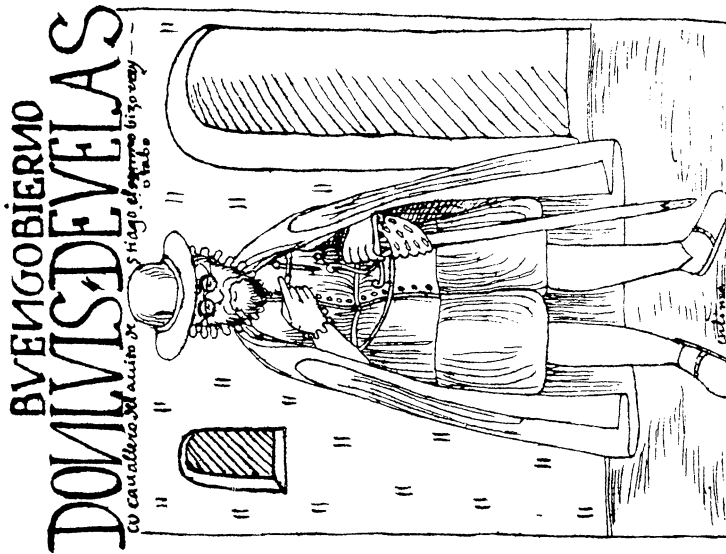
良き統治

第6代副王コンデ・デル・ビリヤールはスペイン国王フェリペ2世の時代、貧しい人々にやさしく、施しをした。無欲で金銭に執着しなかった。哀れな兵士の味方で、富裕層を厳しく罰した。鉱山での改善を行い、死に絶えないよう程々に働くインディオを拷問しなかった。



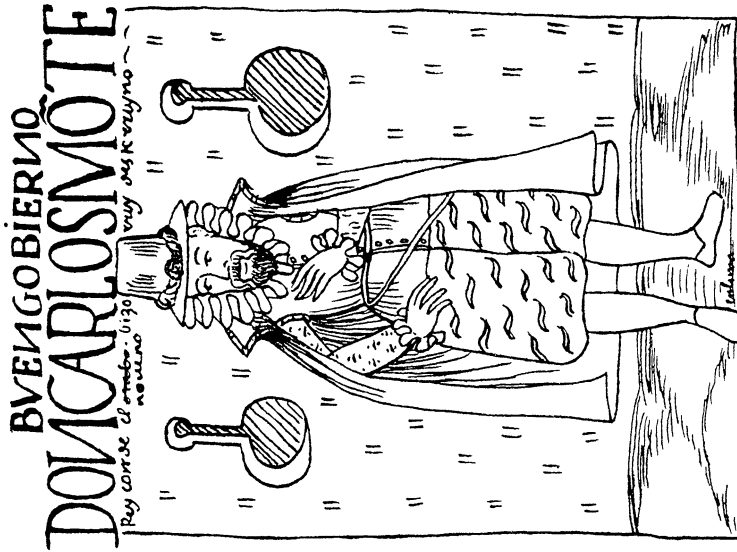
良き統治

第7代副王ガルシア・デ・メンドサはより多くの法律を導入し、スペイン国王に確実に納税される制度を作り上げ、多くの金銭を手にした。土地に税金をかけたので、クスコで暴動が起きた。抗議行動は鎮圧され、暴動は収まった。



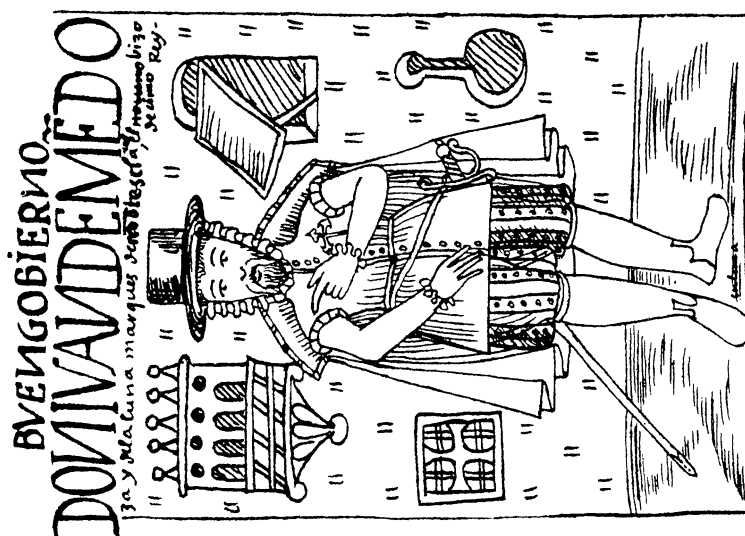
良き統治

第8代副王ルイス・デ・ベラスコはナリヘ行かため船団を設立した。イギリスに対抗するたため誰か税を納める制度作りに尽力した。それがカスティーリヤ法とスペイン王室の法だった。



良き統治

第9代副王カルロス・モンテリーは平和に統治し、インカや有力者、インディオを尊重した。貧しいインディオの味方で、鉱山で酷使され死んでいくことに憤慨した。インディオを虐待する行政官やスペイン人を罰した。司祭が人々に危害を加えたり、犯罪を犯すのを許さなかった。



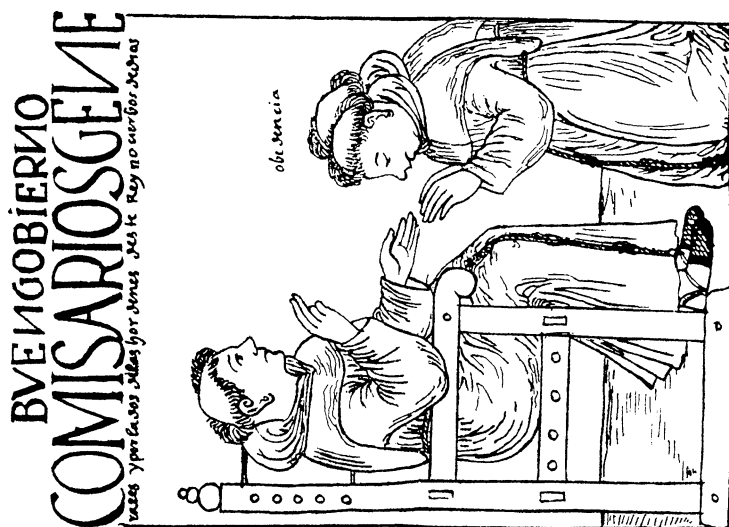
良き統治

第10代副王ファン・デ・メンドーサは貧しいインディオの味方だった。スペイン国王の命令で、フンカペリカの嶺山などを訪ねた。そこで多くのインディオが虐待、酷使され死亡するのを目の当たりにし、そのためペルーの人口は減少していた。そこで、彼は哀れなインディオの現状を知らせるためスペイン国王に手紙を送り、解決策を探ろうとした。



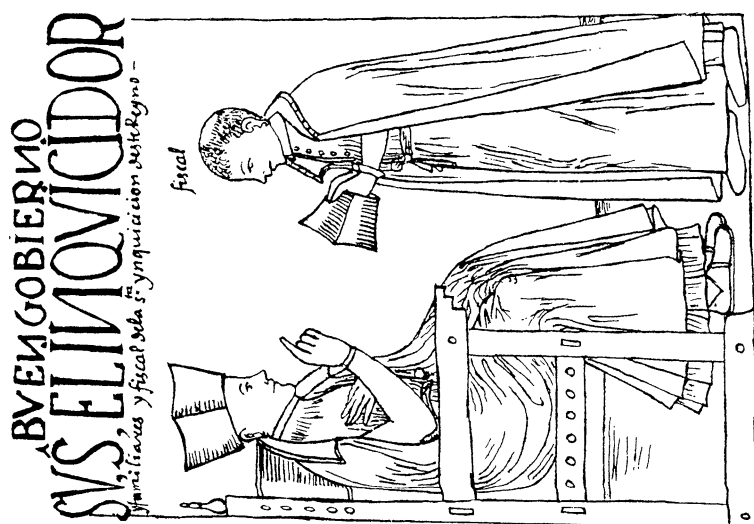
良き統治

リマの大司教。リマの法廷にはローマ法王の代理人である、枢機卿が駐在していた。キリスト教の教えを守り、秩序を保ち、大司教、司教、聖職者、修道院があった。大司教ロアイサはリマに私費で病院を設立し、残りを貧しい人々に施した。



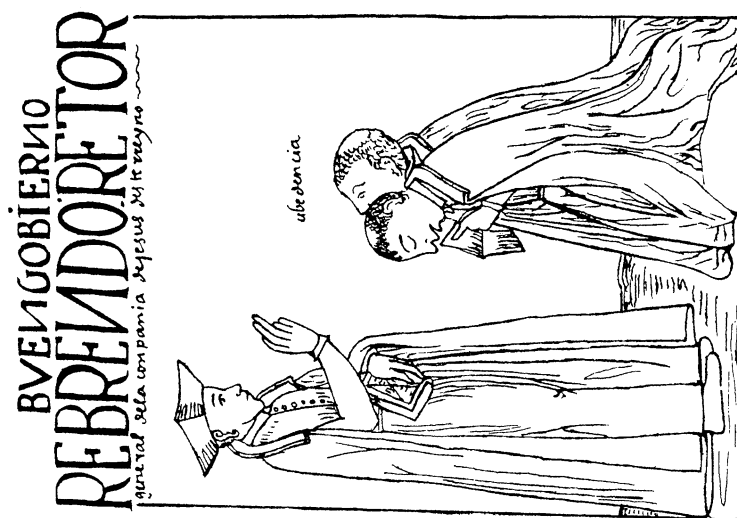
良き統治

聖フランシスコ会修道士のラ・メルセー, サント・ドミンゴ, サン・オーギュスタンは, フランシスコ会のすべての司祭がよきキリスト教徒であり, 我らが主の神と聖母マリア, 聖人, 天使に身を捧げ, 市や町のために尽くすことを望んだ。



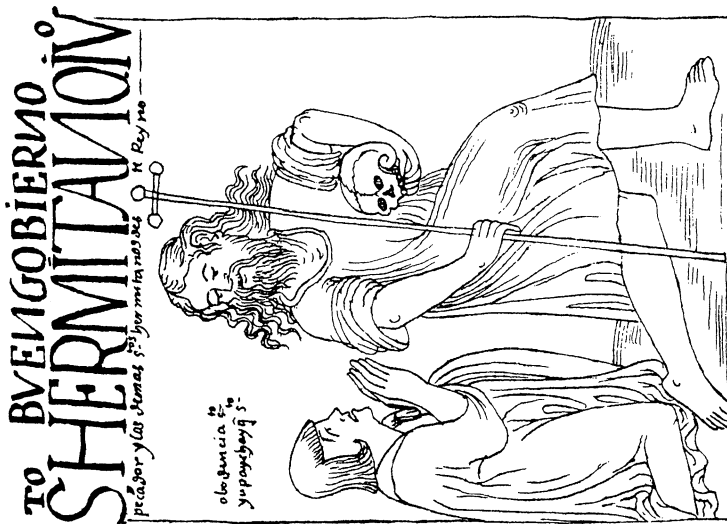
良き統治

偶像崇拜撲滅運動を行う異端審問所長と巡察使、執行官巡察使ブラドはとてども慈悲深く、多くの慈善活動をした。巡察使フロレーレスはよく働き、神とスペイン国のために多くの貢献をしているので、かつてイエス・キリストが我らの主であったように、キリスト教への信仰が高まっている。



良き統治

イエズス会の教区牧師は宣教師であり、芸術や言語の教育を受けている。ケチュア語、アイマラ語、ナンチャイスーユ（北部地方）の言語で宣教する。慈愛の精神をもって、あらゆることを克服し、貧しい人々を救済する。私腹を肥やすことには関心がなく、望みはインディオが教育を受けることである。すべてが貧しい人々に寄付される。



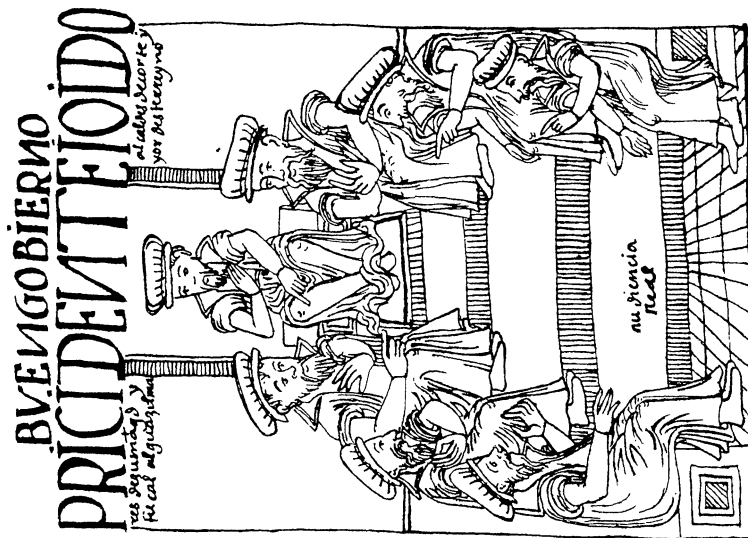
良き統治

荒野、山、病院で神に仕える聖なる隠者は、他の司祭同様、富や利益には目もくられず、キリストのために宣教し、祈り、貧しい人々を救う。昼夜を問わず身を捧げ、己を律する。



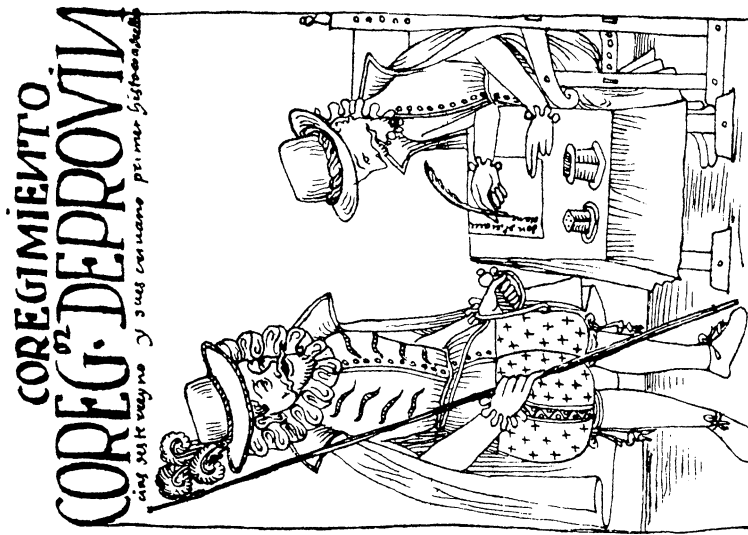
良き統治

修道女院長アベスとインディオの修道女が、イエス・キリスト、聖母マリア、聖人、天使に祈っている。インディオと黒人の女性のために修道院を設立した。イエス・キリストへの信仰が高まると、この世に秩序が保たれ、この国に修道院と司教代理が存在できるようになる。



良き統治

聴訴院（アウディエンス）は、議長（プレジデンテ）、聴訴官（オイドール）、市長、検事、保安官から構成されている。良き統治と裁判のためには、インディオに対して好意的に振る舞う二人の保護官と通訳といった教育を受けた人が必要である。こうしたキリスト教徒の統治者は貧しいインディオには味方せず、富める隣人や鉱山所有者の立場を大事にした。そのため、この地の多くのインディオが死亡した。



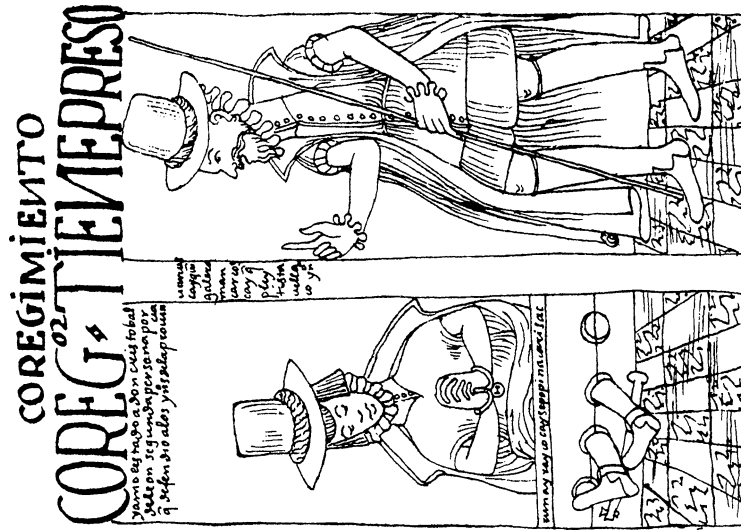
裁判官

この国に法律をもたらす人々の歴史。彼らは神の裁きを恐れなかった。任期が終わると3万ペソを受け取り、富を得た。貧しいインディオを迫害し、権力を乱用し、公職や任務を取り上げていった。副王トレドがコレヒドール（地方官僚）という地位を制定して以来、ペルーの哀れなインディオたちは痛めつけられ、虐げられるようになった。



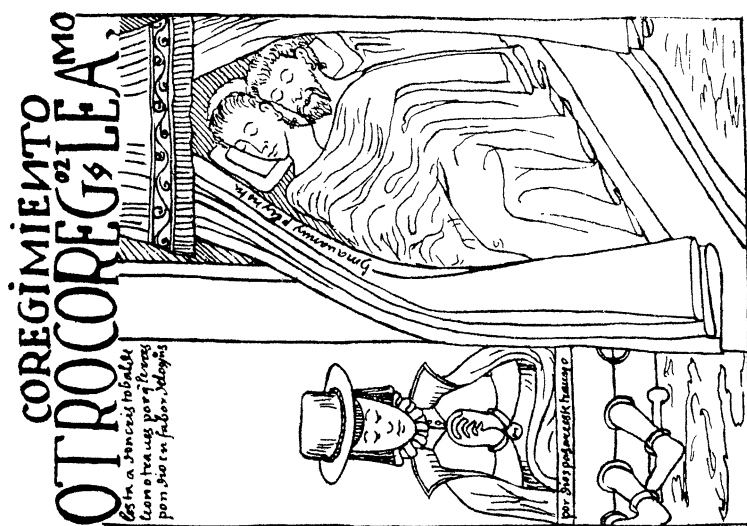
裁判官

コレヒドール（地方官僚）とエンコメンデーロ（委託を受けた行政官）は稼ぎの多さをめぐって口論した。エンコメンデーロ（行政官）は執政官に取り入って、不正な契約を結び、貧しい人々を利用した。まったくの不正だらけで、彼らは衰えなインディオを斬首した。



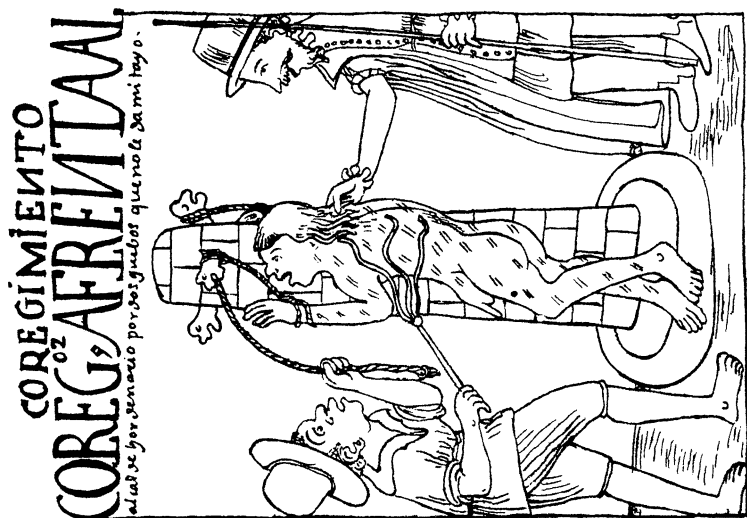
裁判官

コレヒドールが投獄され、インディオを擁護するクリストバル・デ・レオンに詰問される。「インディオ連中をかくまうなら、絞首刑にしてやる」とコレヒドールが言う。私は人々の苦境に心痛めるだろう」とクリストバル・デ・レオンは答えた。コレヒドールが投獄されている間に、人々は彼の財産を奪い、妻と会話できないようにした。



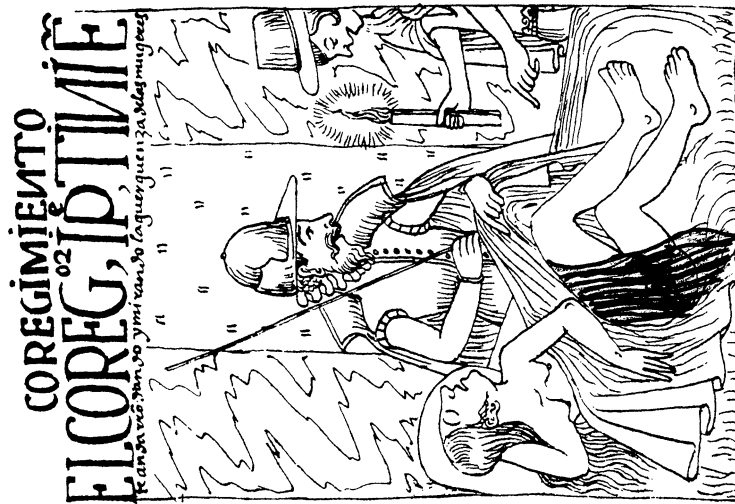
裁判官

ルカナス地方の別のコレヒドールが、インディオを擁護した罪でクリストバル・デ・レオンを捕える。クリストバルは著者の弟子で、彼には貧民を守ろうとした多くの弟子がいた。クリストバル・デ・レオンは優秀で仕事熱心だったため、司祭やコレヒドール、エンコメンデーロによって迫害され、中傷された。



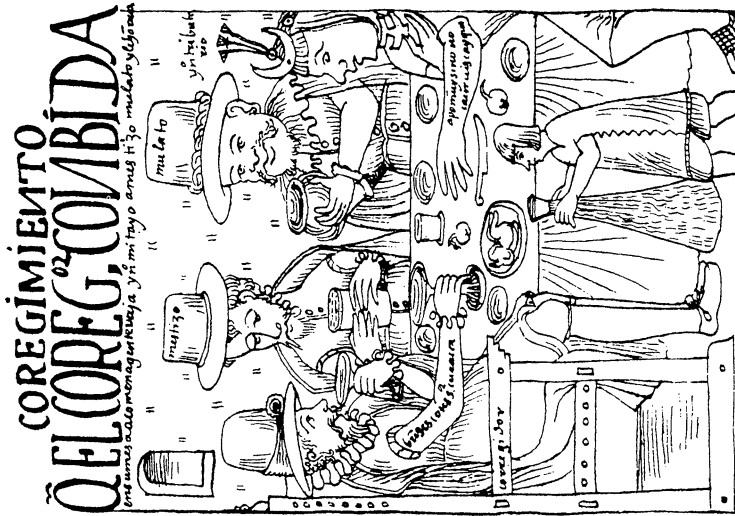
裁判官

卵2個を差し出さなかったという理由で、インディオの役人を懲らしめるコレヒドール。コレヒドールはときに国王よりも絶対的支配者であり、邪悪な略奪者で、証拠なしに残酷な罰を与えた。



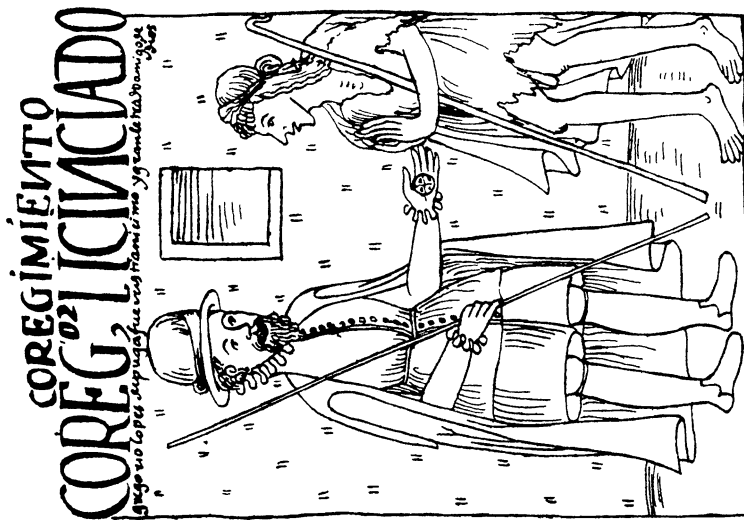
裁判官

コレヒドール、改宗区の司祭、補佐官らはうろつき回って女性を物色し、略奪した。多くの女性と姦通した。その結果、多くの女性が行き場を失い、売春婦となり、混血の子どもが増え、インディオが生まれなくなった。



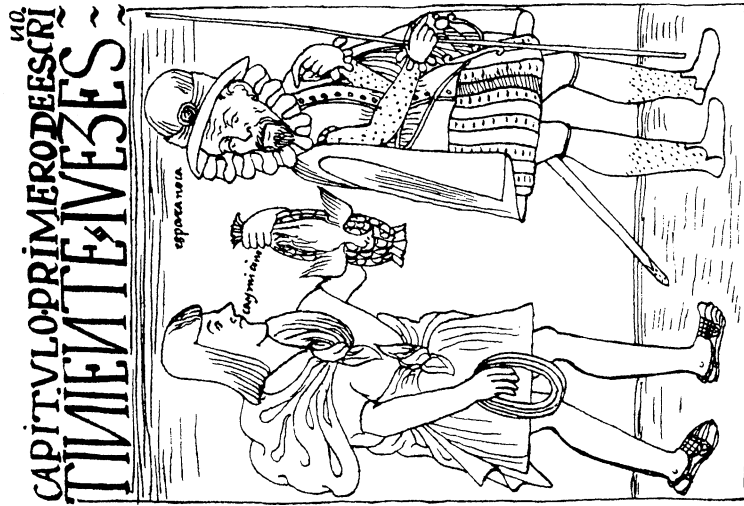
裁判官

コレヒドールが低俗な人々、悪党、泥棒、嘘つき、酒飲みを招いて、食事をとみにし、楽しんでいる。



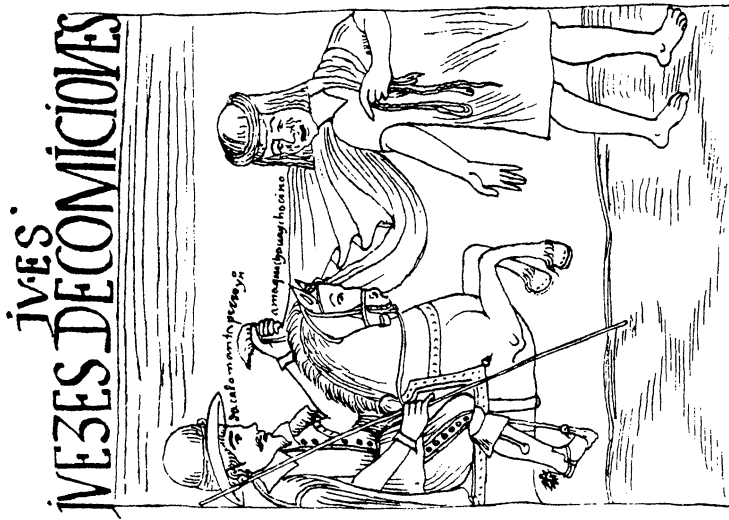
裁判官

世間から認められたコレヒドール、グレゴリオ・ロベス・デ・ブガは敬虔なキリスト教徒で、貧しい人々の味方であり、国王に忠実だった。略奪し、インディオを迫害するコレヒドールのクリストバル・デ・バンドを解任するために送り込まれた。ロベス・デ・ブガが辞任した時、貧しい人々は涙を流した。ロベス・デ・ブガは職権を乱用することなく、妻、子ども、使用人も持たず、一人で職務を遂行した。

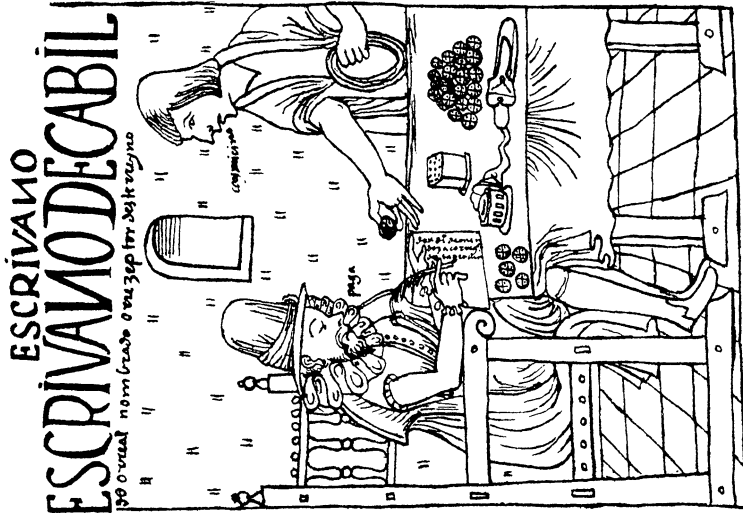


書記官、補佐官、裁判官

コレヒドールのように権力を乱用し、掠奪するために人々はこの地位につきたがった。20〜30人のインディオを無償で働かせ、食事は無料で、貧しい人々には傲慢な態度をとった。ハトゥア・ルカナ村で補佐官が20人の女性に台所仕事をさせ、強姦し、報酬を支払わなかった。法を順守すべき人々のこういった振る舞いは、敬虔なキリスト教徒といえるだろうか。



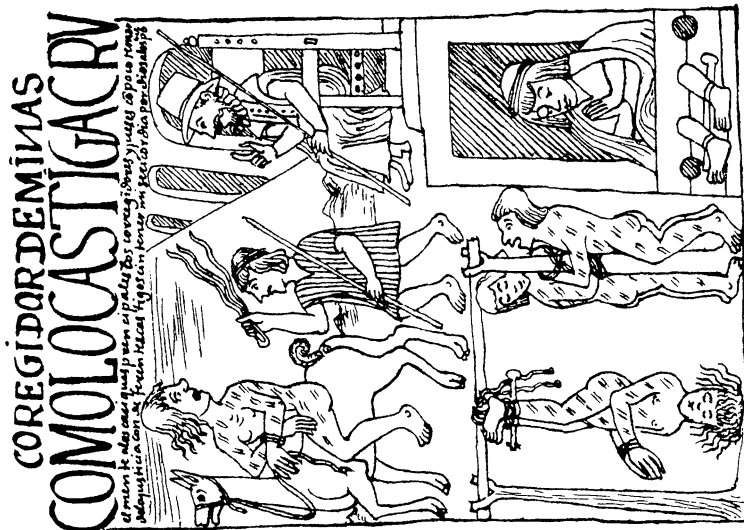
裁判官が論争を裁くために送り込まれた。けれども、土地、家畜、農作物、金、銀などを略奪するだけだった。中には婦女子を強姦し、抵抗すれば殺す者もいた。あるインディオが自己防衛のためにスペイン人を殺したら、その報復としてオコパンバ村のヤウロ族インディオ10人が吊るし首にされた。このような不正行為を行った者たちには何のお咎めもなかった。



書記官

書記官が多額の賄賂や貢物を収税官から受け取っている。さらにインディオを無償で働かせ、食料を貰い、一切支払わなかった。インディオの生産する食料や日用品などから、一年間で書記官は1000ペソ、コレヒドールは2000ペソ、司祭は1500ペソ稼いだ。

第十二編 植民地化とスペイン人支配者（コレヒドール・エンコメンデーロ）



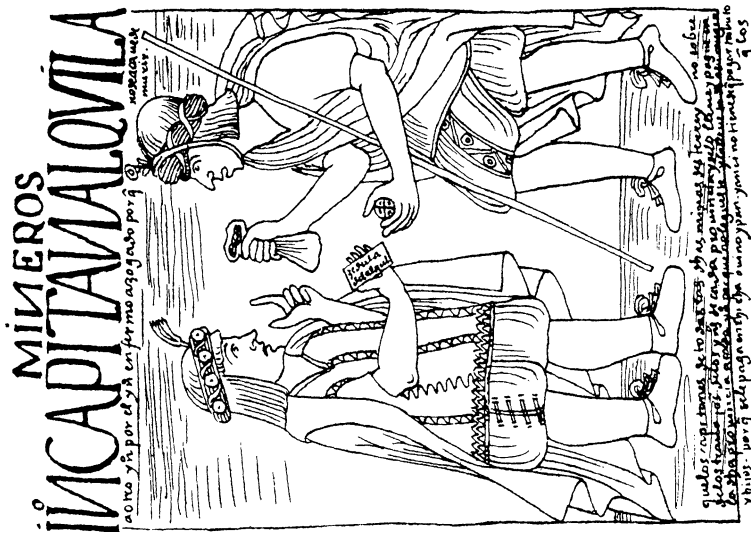
鉱山のコレヒドール

金や銀の鉱山ではインディオが残酷な刑罰に処せられ、カシークたちが逆さ吊りで鞭に打たれ、他のインディオは縛られ、裸にされ、水も食べ物も与えられずに牢屋に閉じ込められた。労働の報酬だけでなく、鉱山までの交通費も支払われなかった。未亡人や子ども、手足に障害を負った人々に補償金が支払われることもなかった。



鉱脈所有者

鉱山所有者は鉱山の貧しいインディオから略奪するために裁判官を送り込んだ。金銭のことしか頭になく、善良なキリスト教徒であることには何の意義も感じていなかった。日曜日のミサにも祭典にも関心はなく、鉱山で亡くなった人たちの葬式に参列することもなかった。



鉦脈所有者

鉦山責任者はインディオに賃金を支払うべきで、そうすればインディオは妻子の待つ故郷へと金銭を持ち帰ることができるのだが、わずかにチチャ、ワイン、パンを差し出すだけで、税を納めることすらできない。



執事

鉦山の執事と酒造労働者。コレヒドール、エンコメンデロ、司祭、スペイン人たちは、絶対的な支配者で、インディオがラム酒を10失ったら、20を支払わせ、さらに賃金も取り上げた。執事らはインディオから略奪し、寝ずに夜を明かし、子沢山で、婦女子を強姦し、台所や納屋に20人の売春婦を置いた。インディオのコレヒドールやエンコメンデロ、司祭に賄賂を贈り、彼らが貧しいインディオを殺害しても罰しなかった。



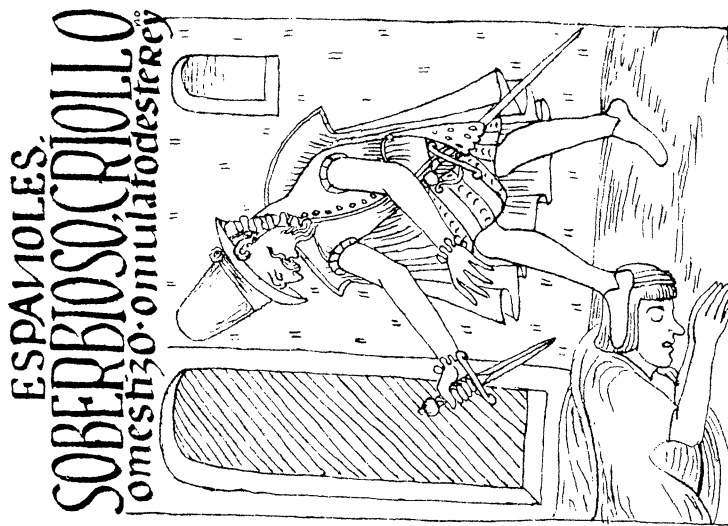
旅行者

スペイン人が宿駅 (タンボ) に到着すると、たとえば司祭であっても、粗暴な振る舞いで、トウモロコシ、ジャガイモ、肉、鶏、卵などの食料を奪う。さらに薪を要求し、料理させる。翌日の朝には、食事代など一切払わずに立ち去っていく。

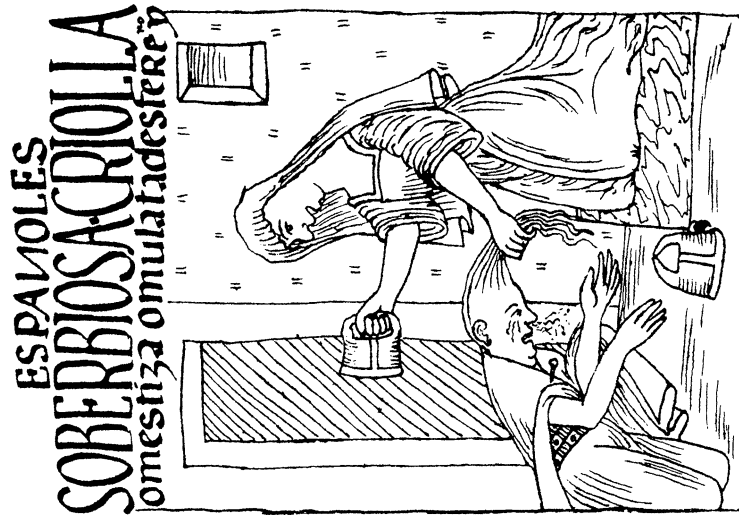


宿駅 (タンボ)

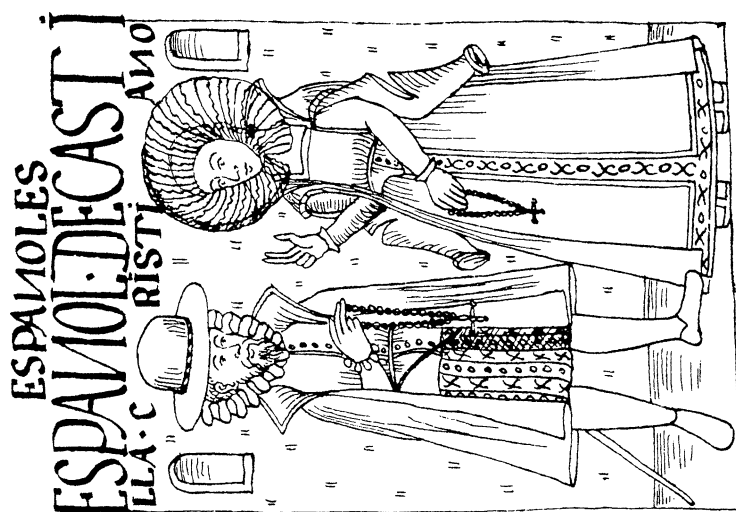
多くのスペイン人放浪者はインカ王道を通り、宿駅 (タンボ) を訪れる。そのため道は荒らされ、インディオは無償で働かされる。自分たちのことを公文書を携えた紳士であると言っていたが、一切支払いをせずに立ち去っていく。屈強な体格の連中はカステイリャにいた時と同じようには、働きたくはないのだ。



クリオーリョ (植民地生まれのスペイン人)、メスティソ (白人とインディオの混血)、ムラート (白人と黒人の混血)
 クリオーリョはインディオの乳を飲んで育ち、メスティソやムラート、黒人よりも悪人である。メスティソは親戚、兄弟、両親に対しては不道徳である。通りでインディオから略奪したり、襲撃したりする傲慢な連中である。インディオの村に住むことが許されるなら、村が破壊し尽くされるだろう。

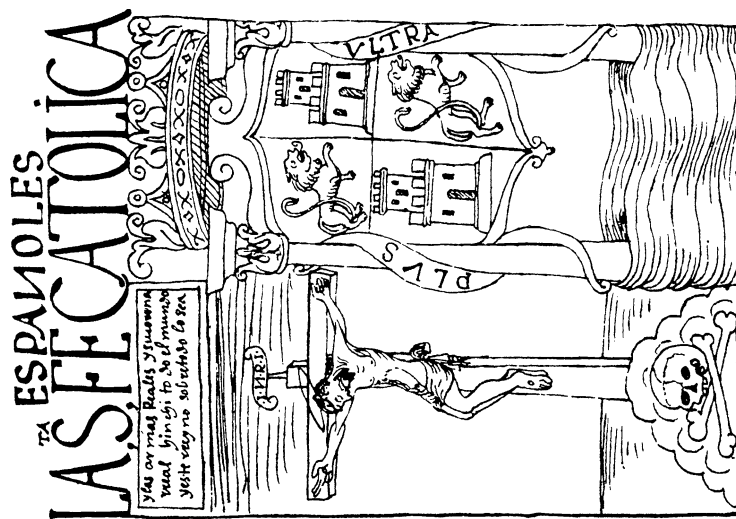


スペイン人
 インディオの乳で育ったクリオーリョ (植民地生まれのスペイン人) は、メスティソ (白人とインディオの混血) やムラート (白人と黒人の混血) よりも悪人だった。怠惰で強欲な嘘つきで、無慈悲で、貧しい人々のために働くことはなかった。親戚に対して酷い振る舞いをし、反抗的なインディオには恐ろしい仕打ちをした。



カステイリーヤ生まれのスペイン人

とても誇り高く、よく教育され、キリスト教への信仰も厚い。希望に満ち、慈悲深く、隣人を愛し、神の教えに忠実である。キリスト教徒たちよ見よ。私はこの国でこのようなキリスト教徒に出会ったことがない。

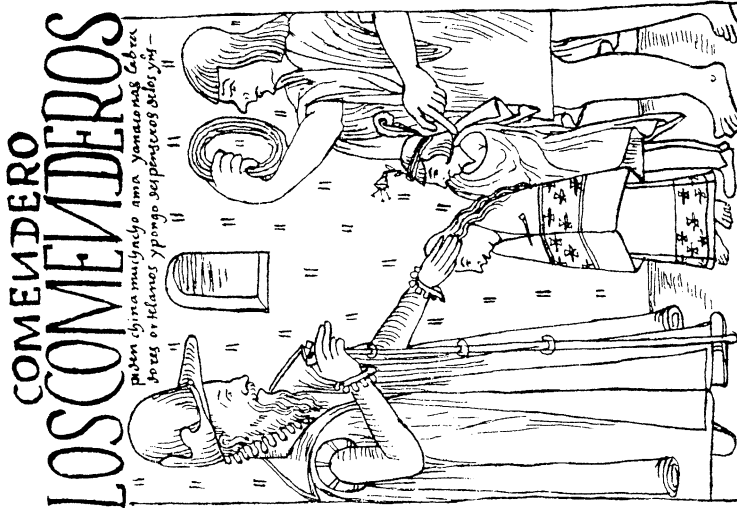


スペイン人

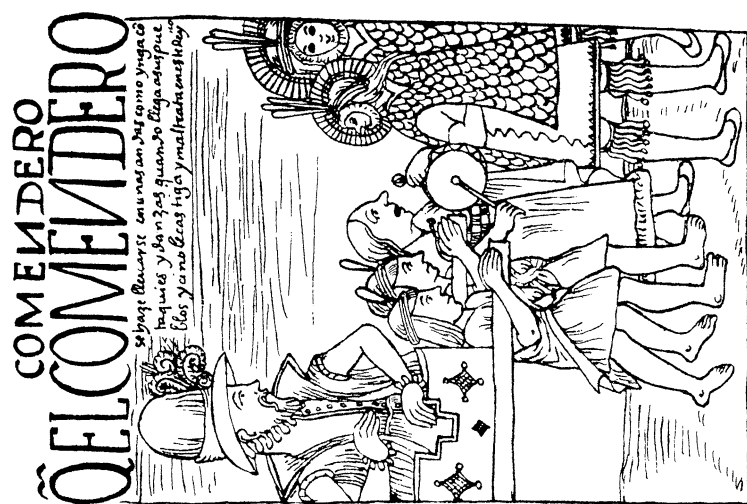
カトリック信仰。我々はすべて神の子であり、またスペイン国王の臣民である。カトリックの教義、ローマ教会、教皇に背き教とを心に留めておくべきである。未熟なままでは、神とスペイン国王と敵対するルター派になる。



エンコメンデロー (委託を受けた人物)
インディオを統治する国王を補助する役割を担っていたが、それ以上に権力を
持っていると思われ、多くの危言を与えた。インディオと権力者はこうしたエンコ
メンデローよりも分別があり、信念を持っているからである。インカ帝国が終
焉した今、あるのは唯一神、父と息子、聖霊であることを知っている。カトリッ
クのスペイン王国になったことを知っている。

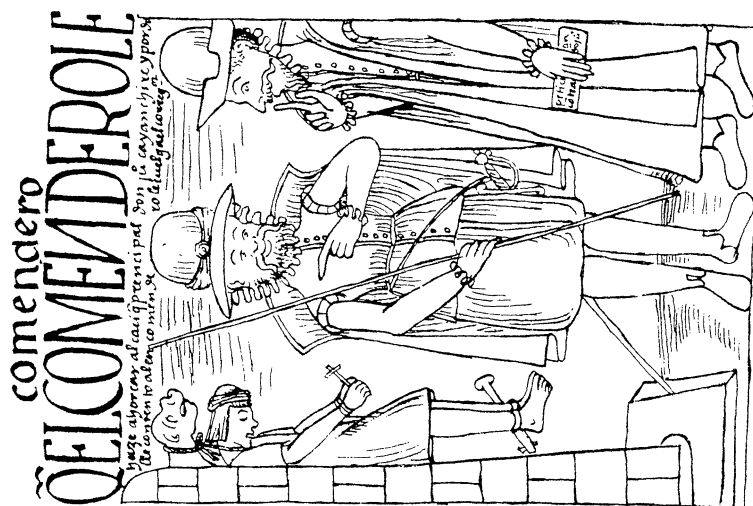


エンコメンデロー
エンコメンデローであることを利用し、インディオにチナヤ、使用人、武器、労
働者を貢納させた。そしてインディオを酷使し、不当に処罰し、子どもを略奪し
た。カシーク(首長)、市長、キリスト教徒のインディオを虐待するので、彼らは
村から逃げ出し、村は荒廃していくが、解決策はない。



エンコメンデーロ

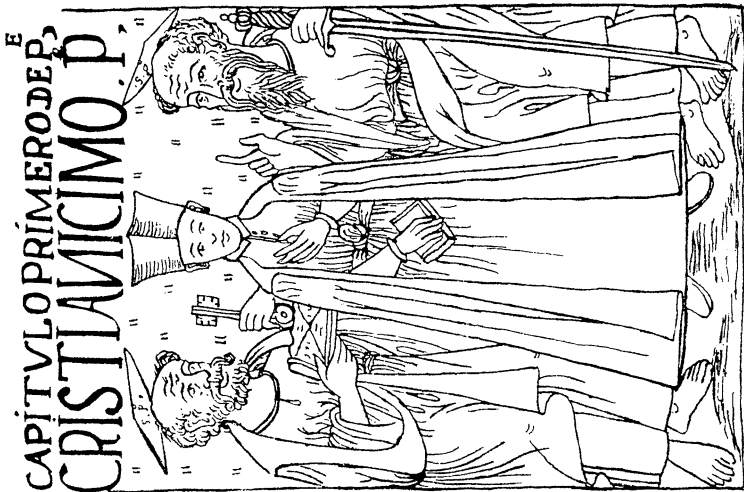
エンコメンデーロとその女性たちは聖人のように御輿で運ばれる。インカ王のようにあちこち巡り、歌と踊りで迎え入れさせた。インディオに彼らの家を建てさせ、畑で働かせ、家畜の世話させ、報酬は一切払わなかった。



エンコメンデーロ

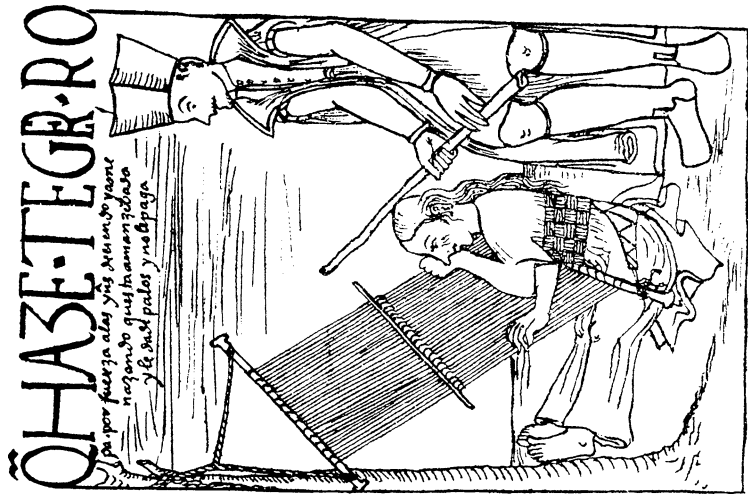
インディオを守ろうとするカシケ (首長) にとって、エンコメンデーロは不倶戴天の敵である。このコレヒドールはエンコメンデーロと司祭を喜ばせようとフアン・カヤンチャアを絞首刑にした。ペドロ・ボマソングは追跡され殺害され、クリストバル・デ・レオンも捕えられ、罰せられた。

第十三編 スペイン人支配者 (司祭・修道士・巡察使)



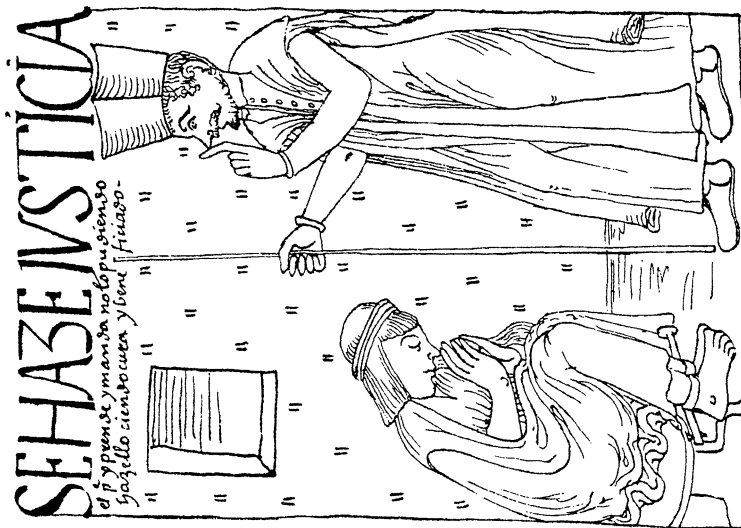
司祭

すべてはイエス・キリストと聖ポール、聖人、十二使徒によって始まった。どのキリスト教修道会も、旅してまわった創始者たちの行為とは全く異なり、金や衣服を貪り、不貞の罪にまみれている。改宗区の司祭たちは短気な暴君的振る舞いで人々に辛くあたるので、インディオは怖れをなし、逃げ出す。イエス・キリストは貧しく、謙虚だったから、哀れな罪人を魅了し、聖なる教えへと導き、天国に召されたことを、こうした司教たちは忘れてしまっている。



司祭

改宗区の司祭はインディオの女性に織物をさせ、罪を犯したと非難して、棒で殴り、報酬を払わない。喪失感に陥っている女性たちは、強姦され、娼婦になる。つまりこうした女性たちは司祭やスペイン人との情交を重ねて生きていくことになり、結婚できなくなる。司祭はキリスト教会の評議委員会の命令に従おうとしない。



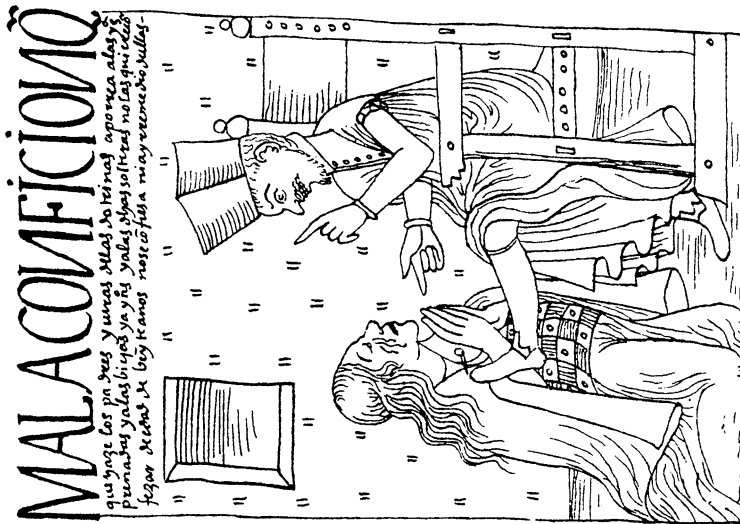
司祭

司祭は自ら正義を行う。この司祭はインディオを脅かすことなく捕えた。さらに、司祭に仕える女性を妻や第二婦人のように扱った。女性たちには20人もの子どもがいた。これは周知の事実で、問題を選けるために、子どもたちは従兄弟、つまり親、兄弟の子どもでもあると言う。こうした行為はキリスト教徒としてあるまじきものだ。



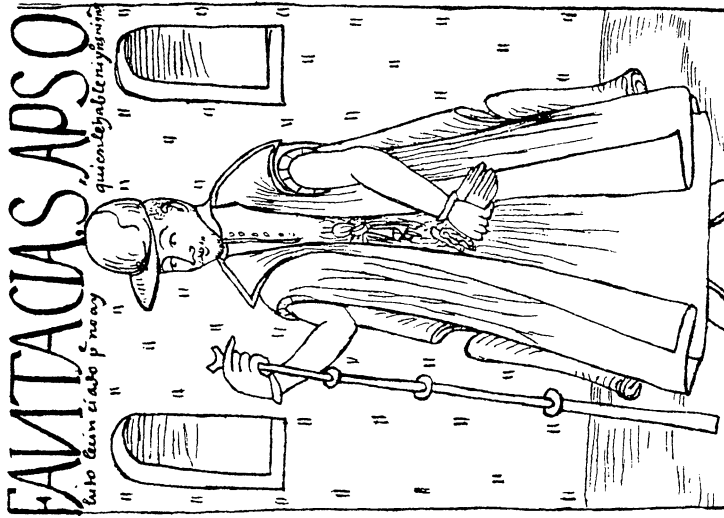
司祭

司祭はインディオたちの意思を無視して、結婚させた。若い女性が司祭を拒んだら、妊娠したり、司祭と情交を結ばなかったという理由から。この司祭を見よ。このような振る舞いの司祭にインディオが従うだろうか？



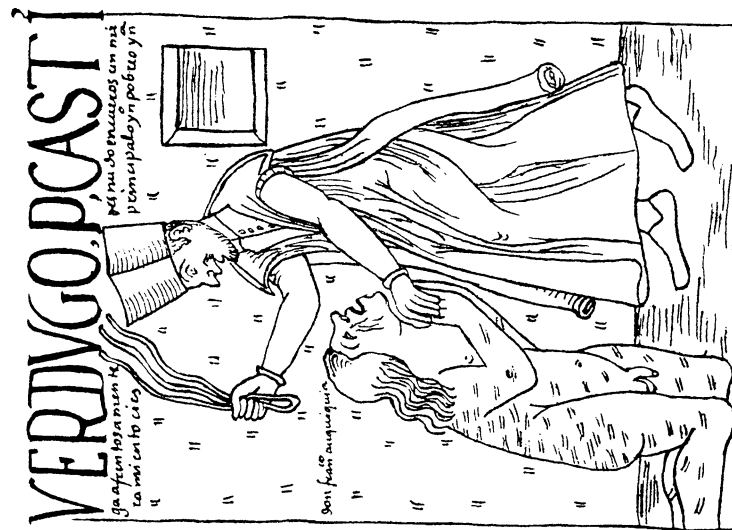
司祭

司祭が非道に懺悔させている。インディオの妊婦や、高齢の女性、男性を打つ。司祭たちは教会や集会室などの暗く人目につかない部屋を持ち、懺悔をするという口実で、独身のインディオ女性を連れ込み、姦通したのだろう。良き規範が広まるためには、こうした社会規範に反する行動は罰せられるべきである。



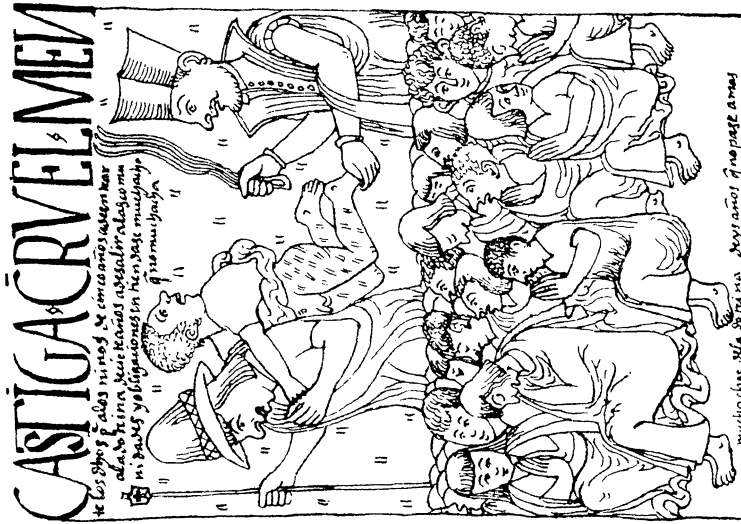
司祭

司祭とは、女性だろうと男性だろうとインディオには話しかけることのできない、絶対権力者である。司祭はとても裕福なので身分が高いと思っている。いつもシルクの衣服を纏い、兵卒のような帽子を被っている。シルクの衣装や帽子を身につけなかったイエス・キリストの司祭とは、似ても似つかない。イエス・キリストは伝道の旅の途中で衣装を変えたことはなかった。



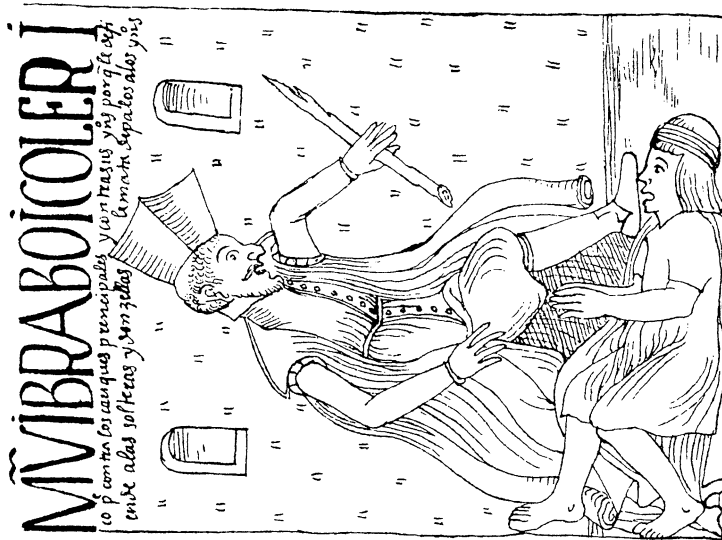
司祭と死刑執行人

改宗区の司祭は、死刑執行人でもある。司祭自ら、あるいは検察や市長と結託して、哀れなインディオを罰する。彼らは昼夜かまわず通りを巡回し、インディオの家に押し入り食料や子どもを奪い、多くの苦しみを与え、神への崇敬の念など持ち合わせていない。



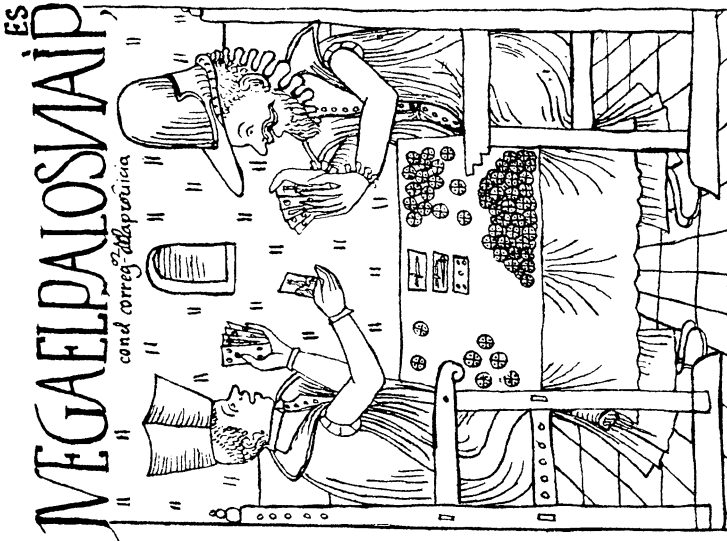
司祭

教養を学ぶために集まった5歳の子どもたちには、司祭は残酷なお仕置きをする。スペイン王国の後ろ盾を得て副王トレドは、7歳になったら子どもたちを共同体に帰さなければならぬとした。しかし、司祭らはこの規則を悪用して、9歳の少女、20歳の独身女性、さらには40歳の女性までも集めて、無報酬で様々な仕事をさせる。



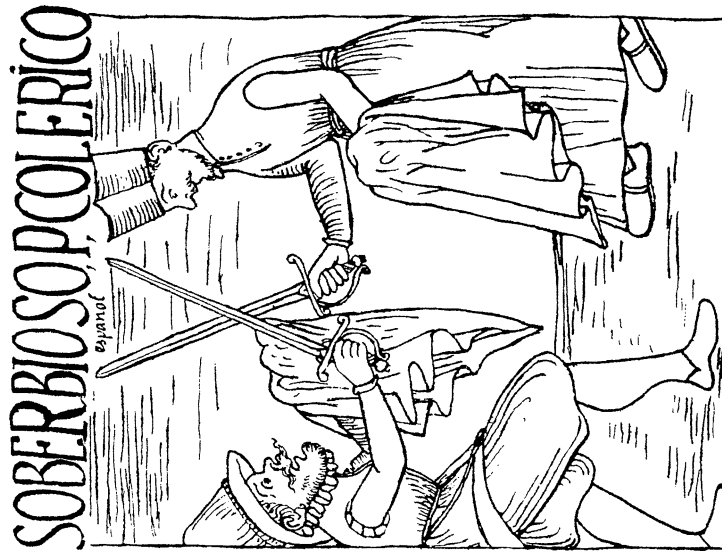
司祭

この司祭は気性が荒く短気で、妻や娘を守ろうとするとカシケ(首長)やインディオを追放し、罰した。神や正義を恐れぬ振る舞いに、惨い行為を証言しようとする者はいなかった。読み書きのできる知識のあるインディオが現れると、司祭の改宗区から追い出してしまったので、司祭の暴挙を訴えることができなかった。



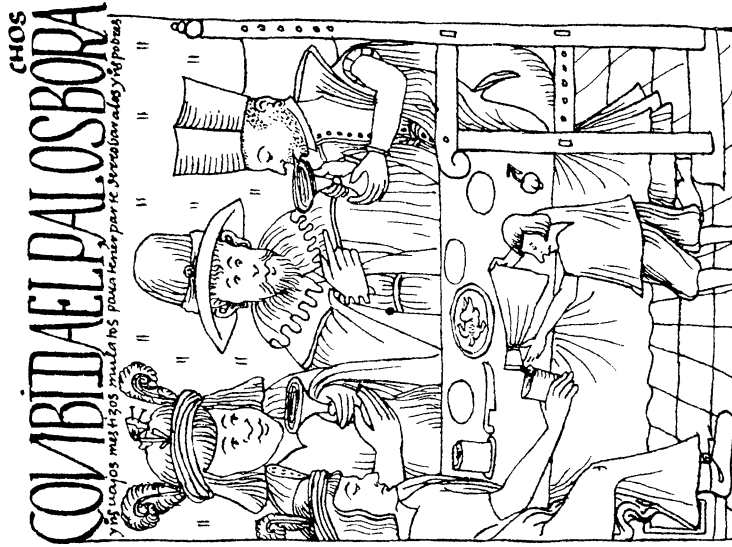
司祭

コレヒドールとトランプに興じる司祭。彼らは自由に振る舞い、横柄で、神や正義を何とも思っていない。教会や大広場で、既婚のスペイン人やインディオを泥棒呼ばわりして侮辱する。夫や他人がいる前で、女性を娼婦呼ばわりする。キリストに仕える者として、愛と分別を持って罪人を罰すべきであることなど忘れてしまっている。



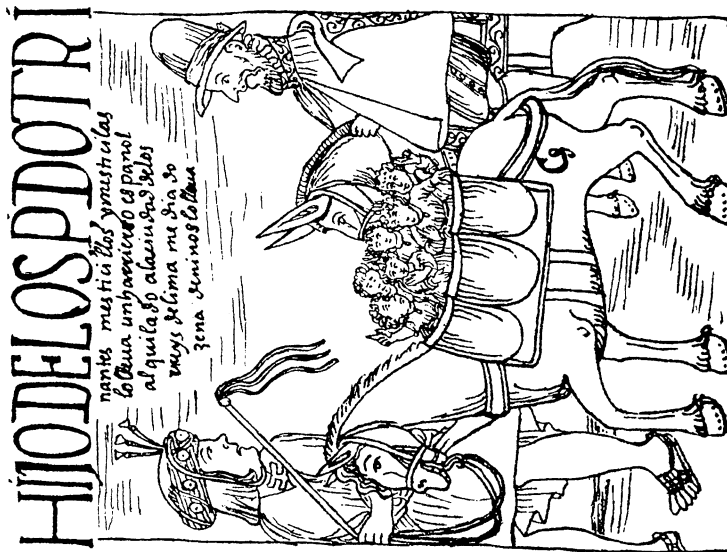
傲慢な改宗区の司祭

司祭が、貧しいスペイン兵やコレヒドール、司祭、エンコメンデーロ、カシーク(酋長)、貧しいインディオの生活ぶりを見てまわるので、彼らは不備や弱みを隠しておけない。



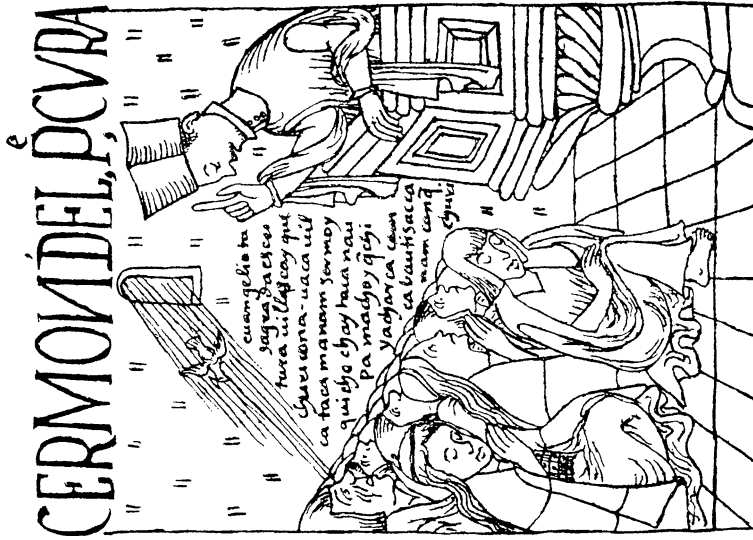
司祭

司祭は貧しいインディオからの掠奪をもくろみ、卑劣なインディオやメステイソン、ムラートを酒宴に招く。彼らは教義の実行を声高に訴え、インディオのドン・ファンとドン・ペドロに貢ぎ物を要求し、一緒に飲み食いしている。二人のインディオの子どもや姉妹と関係を持っているからである。



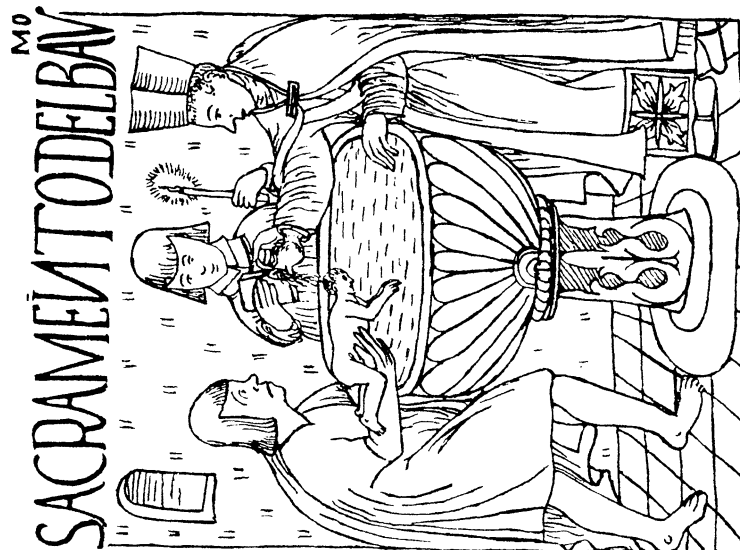
司祭

スペイン人の輸送業者が司祭の7人の子ども（メステイソ）を馬に乗せリマへ運ぶ。インディオには子どもがおおらず渴望していたので、彼らは怯えている。1600年にティエポロの村で、司祭が教示するという口実で独身のインディオ女性を集め、男性を教室から追い出したのを私は見た。その司祭はたいへんな資産家で、いつも手入れの行き届いた身だしなみをしていた。嫉妬から若い女性に絞首刑を宣告した。



司祭

クスコの司祭はケチュア語、アイマラ語、チンチャイスーユ（北部地方）の言葉をおまじ話せない。そのため、適正に右解を執り行えず、福音や、キリストと聖母マリアに関する教義を教えることもできない。いくつかの単語しか知らず、それでもインディオを教育している、改宗区の責任者であると主張する。



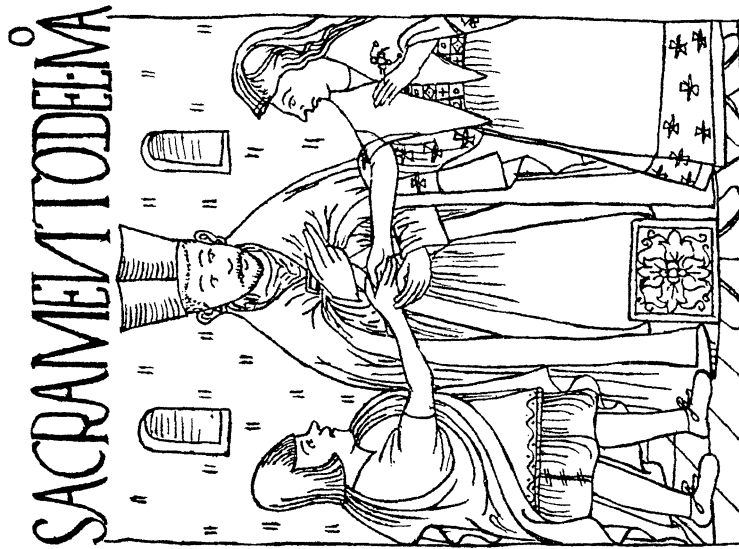
洗礼

司祭はインディオをキリスト教に改宗するために洗礼を施さなければならぬ。そのあとにインディオは盛大な宴会を開き、司祭に寄付し、父なる神を称える。きれいに着飾り、洗われて、トランペットやフルートの音色、音楽、ダンスのなか、信義へと導かれる。インディオが偶像崇拜や飲酒をしないように、宴会は冴で行うべきである。



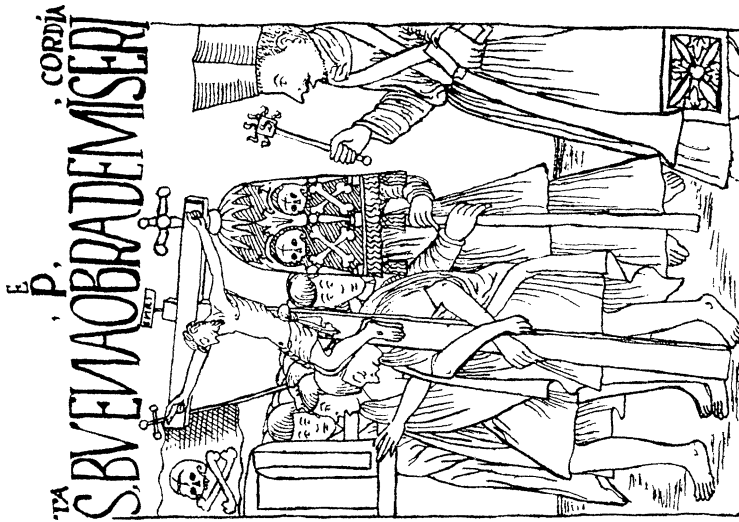
赦しの秘跡 (告解)

司祭は告解を通じて、信者のそれまで一週間の良心を調べる。インディオもスペイン人も同様である。インディオには大罪と小罪との違いを教えるなければならない。独身であれば私通、既婚であれば不貞、両親には近親相姦などについて。キリスト教徒が犯してはいけない最大の罪は、神に仕えたと誓った聖職者と情交を結ぶことである。これは神への冒瀆である。



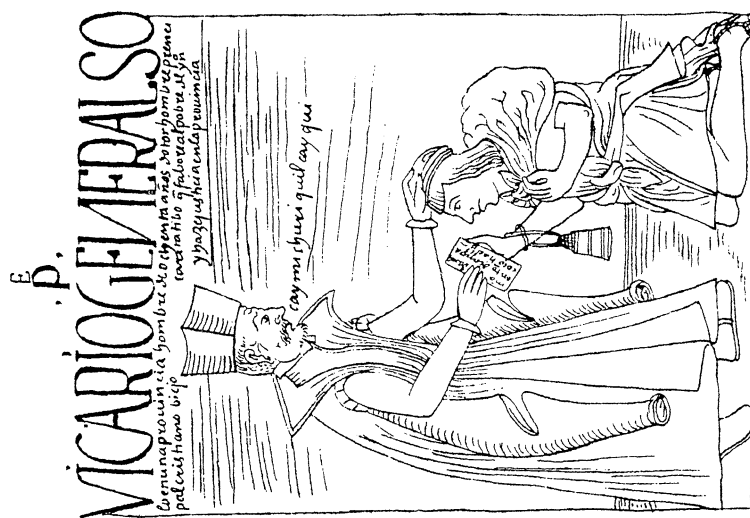
婚姻の秘跡

司祭は二人が身も心も清らかに生きて行くことを確かめなければならぬ。できれば金や銀の装飾のついたシルクの衣服で着飾るべきである。教会から家までのアーチで飾られた道を、踊りや歌で祝福されて行く。司祭は果物を供え、教会で福音を説教する。新たに夫婦となった二人は司祭と村人を家に招待する。



司祭

キリスト教徒の葬儀では慈悲深い心で儀式を執り行うべきである。顔と手足以外は覆わなくてはならない。インディオの習俗では、顔、口、手に金、銀、食べ物を供える。インカ時代からの伝統ではサンダルを履く。



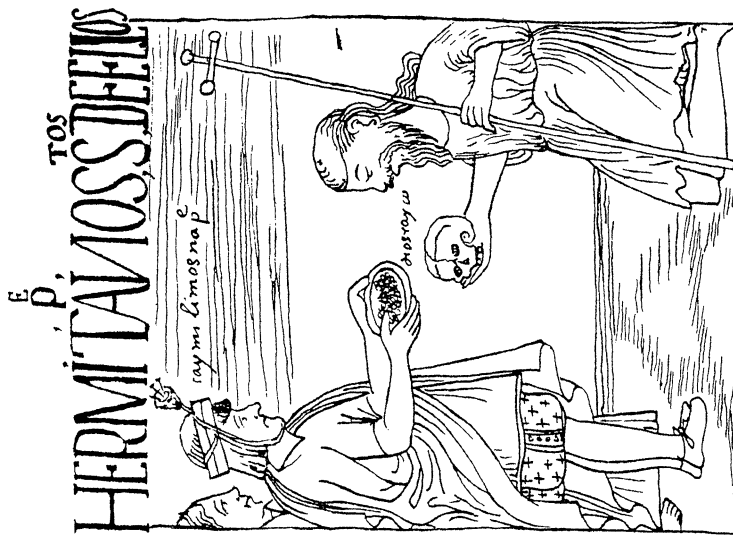
張
同

司祭代理は80歳代で、博學で教育を受けていて、謙虚で、慈愛に満ち、思いやりがあり、血筋が良く、裕福で正直な紳士的な人であるべきだ。実際の司祭たちは、罰せられるべききつい言動を繰り返し、インディオの村は人口が減少している。



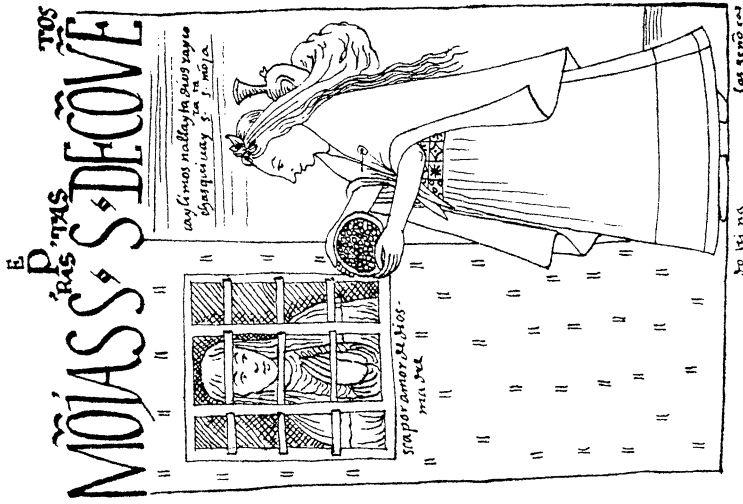
フランシスコ会士

フランシスコ会士は敬虔なキリスト教徒であり、謙虚で慈悲深い。質しいキリスト教徒に大きな愛情を持つて接する。そういう慈悲愛によって裕福な人々だけでなく、貧しいインディオも魅了していく。彼らの口から罵声を聞くことはない。フランシスコ会士が村を巡回しながら告解したら、誰もが参加し、逃げ出したりはしないだろう。人々は集まってきたて司祭の手にキスをさすだろう。



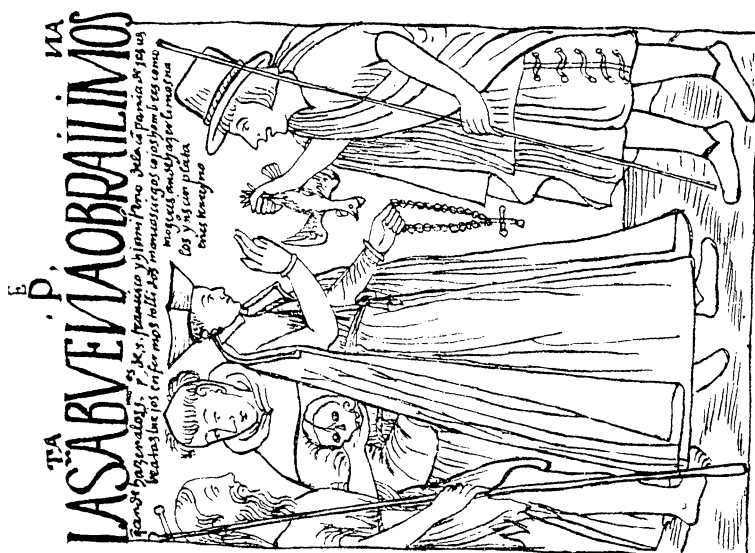
聖パウロ会士

聖パウロ会士はキリストの聖なる使徒である。教徒には慈愛深く接し、酷いことはしない。この世の貧しい人々のために施しをし、またそのために寄付を募る。金銭や富に執着せず、貧しい人々を愛し、他人と争いをしない。すべての司祭が彼らのように謙虚であれば、皆素晴らしい聖職者になるだろう。



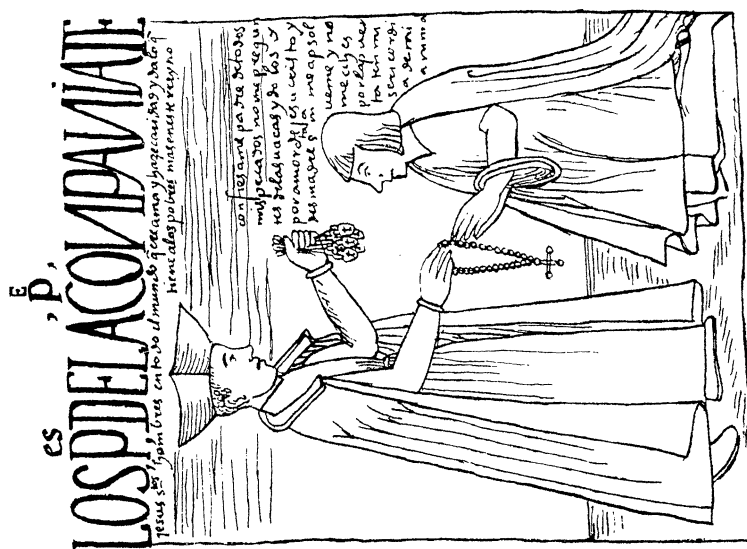
敬虔なキリストの教徒、修道女

修道院を訪れるインディオオは男女を問わず、慈愛をもって歓迎される。けっして言い争ったり、傲慢な態度をとったりしない。この世の女性たちは、傲慢で、強欲で、身勝手で、うぬぼれていて、貧しき隣人に施しをしないが、修道女たちは違う。このような信仰深い修道女と接して、天国へ行けるように学びなさい。



司祭

この王国の村や宿駅（タンボ）を訪れるイエズス会士，フランシスコ会士，隠遁者，修道士はインディオに施すべきである。同じように，手足の不自由な人や病人，目の見えない人，孤児にも救いの手を差し伸べるべきである。80歳もの高齢者には食料，卵，めんどりが授けられるべきである。



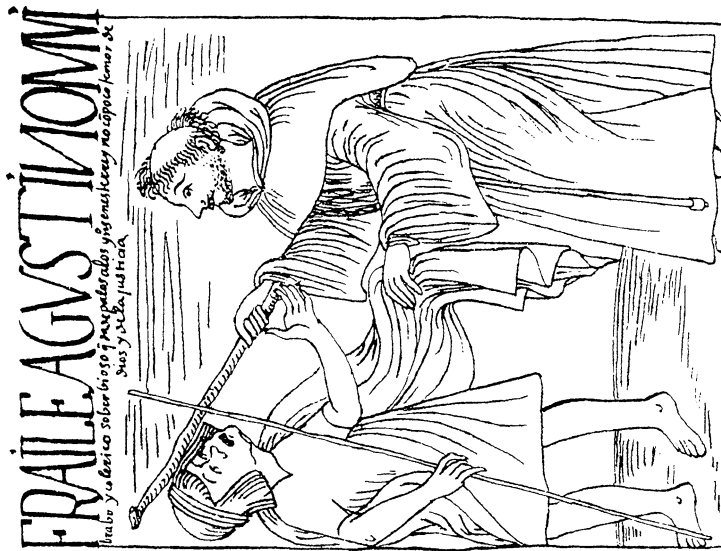
イエズス会士

敬虔な司祭で，慈愛深く，貧しき人々に施しをする。教育を受けており，すばらしい伝道師である。イエズス会士がインディオの町や村を訪れると，人々は喜ぶ。まるで天国の神がこの王国に訪問しに来るみたいである。神様様，イエス・キリストの愛をもって，私の懺悔をお聞きください。他の神々や偶像崇拜をお許しください，とインディオが言っている。



司祭

この王国のインディオが知らなければならない宗教儀式がある。復活祭、キリストの教々の奇跡、キリスト教徒であるインディオの善行、スペイン王室、カラブコ、サンタ・クルス、代表的な使徒の聖ヤコブ、フランスの聖母マリア、12使徒のバルトロメオなど。



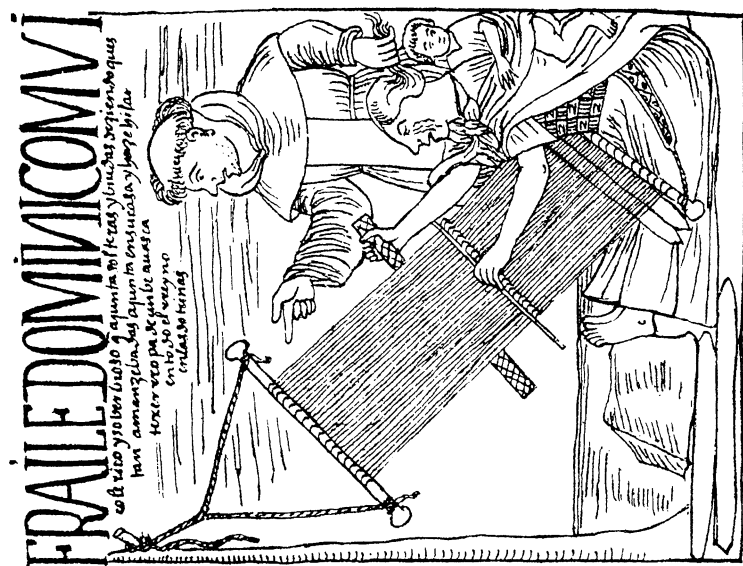
司祭

オースティン修道士は気性が激しく、短気で、神への畏れを抱くことなく、この王国のインディオを叩く。そのため、人々は身を潜め、寄附しようとも、救済してもらおうとも思わない。しかし、聖オースティンは素晴らしい聖職者だった。彼の弟子たちが彼のように振る舞ったなら、大勢の聖職者が存在しただろう。



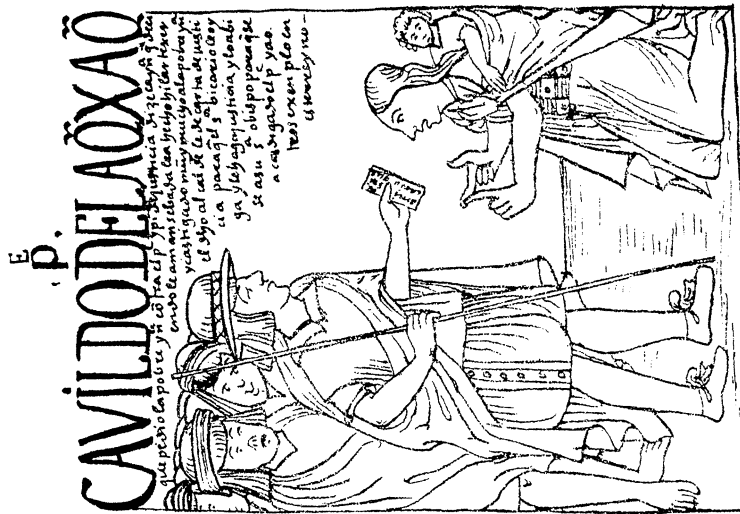
司祭

メルセード会士ムアール。気性が激しく粗暴で、インディオを無理やり働かせ、打ちつけ、虐待した。この王国の改宗区に解決策はない。この司祭はヤナカの村で独身女性を集めて糸を紡がせ織物をさせた。また偽の証明書で、インディオ男性や女性、森林に住む人々、使用人を罰し、略奪した。



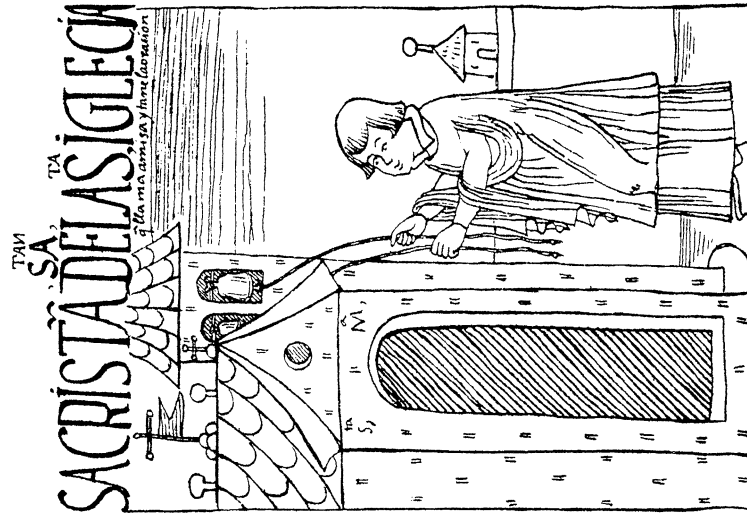
司祭

ドミニコ会士。気が短くて傲慢で、独身女性や未亡人を罪人であるとして集め、休みなく糸を紡がせ、衣服やコースター、旗、ペッドカパーなどを織らせた。司祭である彼らに誰もどうすることもできない。こうして村は荒廃していく。こうしたドミニコ会士は実社会に出ることなく修道院にいた聖ドミニコのように振る舞うべきである。ドミニコ会士の中には、教養のある伝道師としてすばらしいキリスト教徒もいるのだから。



村の司祭

無理やり糸を紡がせ織物をさせ、虐待した司祭に対する裁きを嘆願するインディオ女性。市長が彼女に手紙を持たせたので、彼女は司教代理と面会することができ、市長は話を聞き、司教に現状を知らせ、他の司祭に知らしめるためにも、その司祭を罰するよう掛け合うべきである。



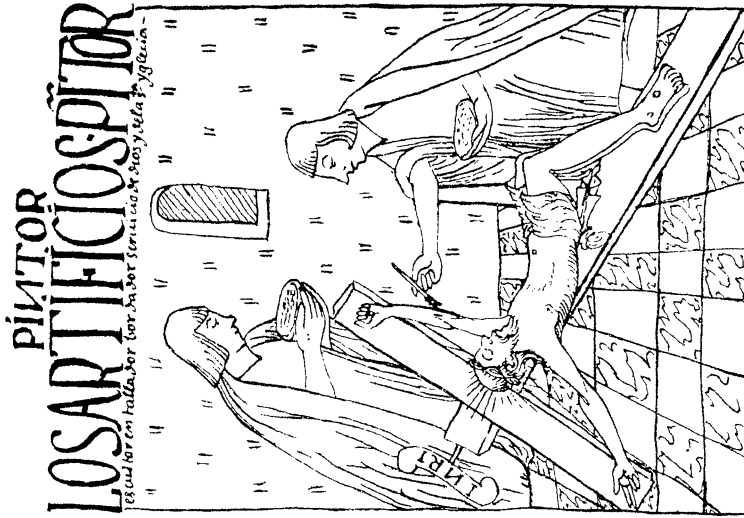
教会の聖具保管担当者

聖具保管担当者はミサや祈りの鐘を鳴らす。足が不自由だったたり、病气、背中が丸かったり、脚を失ったり、高齢者などの税を納めていないインディオの人々が務めるのが良い。そして、この王国のインディオがキリスト教の教えや儀式、葬式と言った式典を忠実に守るように取り計らうとよい。



聖歌隊と学校の教師

この王国の子どもの教育を担っている。男の子は学校で、女の子は家で教育を受け、よきキリスト教徒になるよう読み書きを学ばなければならない。教師にはキリスト教を教える義務があり、酒を飲んで酔っ払ったり、コカを噛んだりすべきではない。教師に報酬は支払われるべきだが、生徒にきちんと教えない者には支払う必要はない。



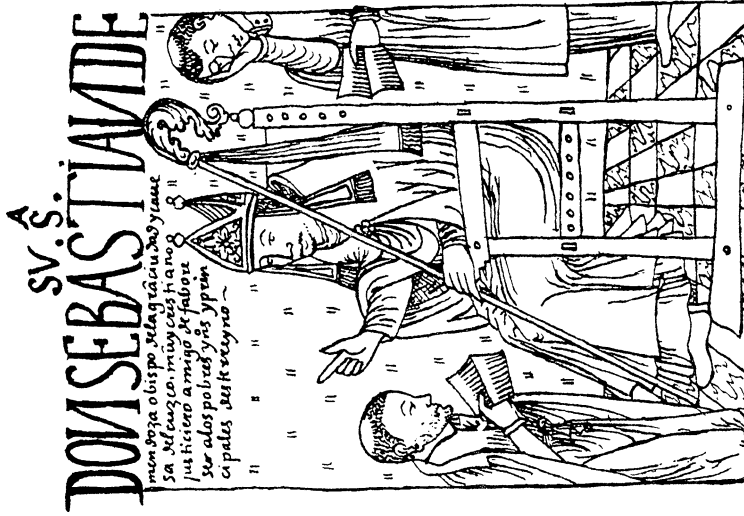
画家、彫刻家、仕立屋、刺繍職人、聖なる神や教会に仕える芸術家と教会での仕事

キリスト教徒でない者は、像に触れることはできない。信仰心を持たずに像をみると、信仰できなくなるからである。すべての教会には最後の審判を描いた絵があるべきで、その中ではキリスト教徒の罪人に対する証言として、キリストと天国と地獄が示されている。



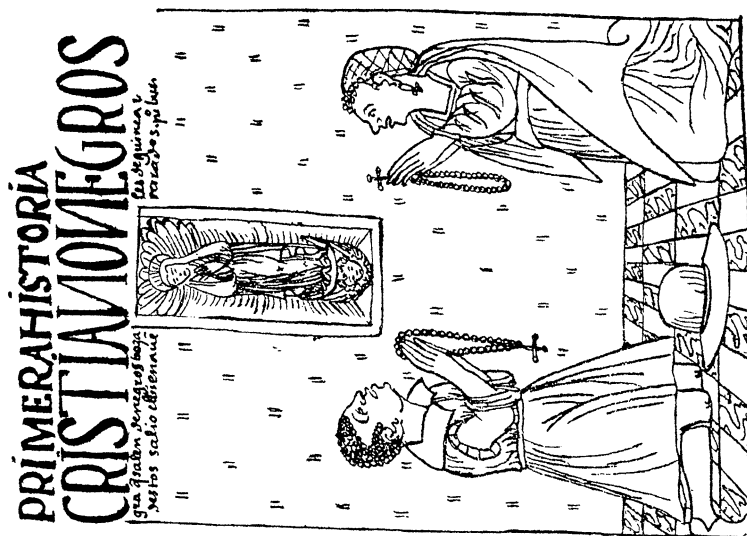
哀れなインディオ

6種類の動物が哀れなインディオを食らい、肥える。コレヒドールは蛇、タンボから出て来るスペイン人は虎、エンコメンデードーロはライオン、司祭は狐、書記は猫、カシケは鼠。こういった動物たちは神を恐れず、この王国の哀れなキリスト教徒を抑圧し、その解決策がないのである。



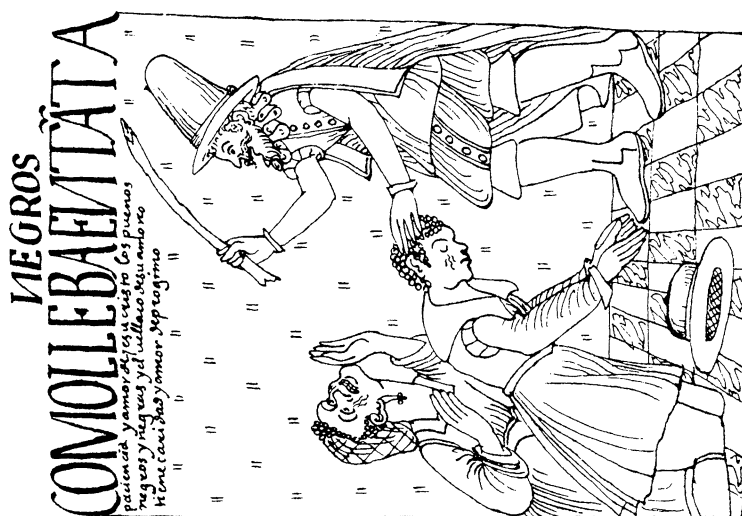
クスコの司教、セバスチャン・デ・メンドーサ

敬虔なキリスト教徒であり、誠実な人物で、哀れなインディオの味方であり、この王国にとって重要な人物である。神の御加護のもと、正當な裁きを行い、キリスト教徒である哀れな人々を守る事ができる。



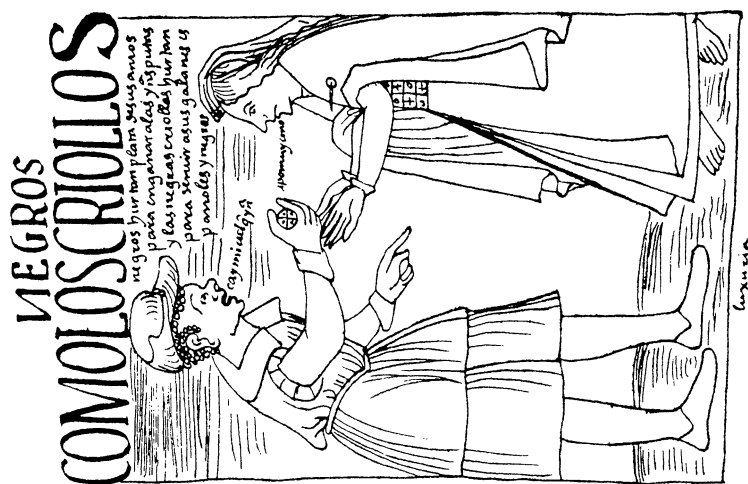
謙虚でよき結婚生活を送る黒人キリスト教徒の歴史

ギニア出身の黒人は口輪を外す。誠実で、キリストを信じ、その教えに従う。サン・ボワン・ブエナヴェントゥーラをつけた黒人は、善良な奴隷である。逞しい彼らは、キリストとスペイン王国に仕え、食料や武器を提供し、トルコ皇帝を倒す助けになるだろう。



黒人の歴史

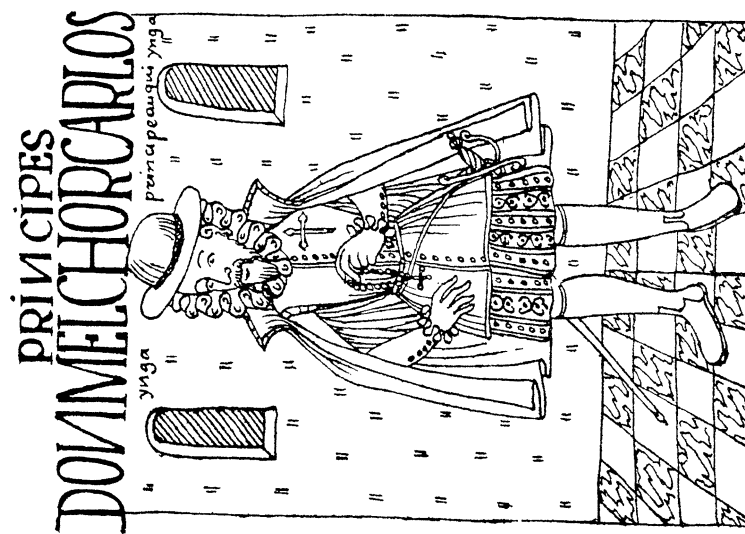
この黒人の男女は忍耐強く、キリスト教を信じている。雇い主であるスペイン人は横暴で、黒人に対して愛情も慈悲の心も持ち合わせていない。更に悪いことに、スペイン人雇い主の女たちは、神も正義も信じておらず、黒人を酷使し、食べ物や衣服を与えない。奴隷たちは沈黙を守り、低姿勢で、そして神への感謝を忘れないから、生き延びているのだ。このような状況のため、雇い主のもとから逃げ出す者もいる。



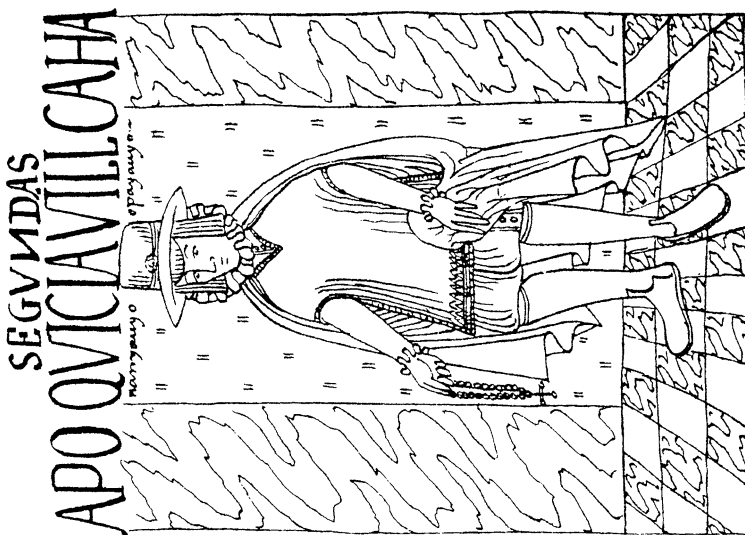
黒人の歴史

黒人のクリオーリョ (新大陸生まれ) はインディオの売春婦を誘惑しようと雇い主から盗みを働き、黒人のクリオーリョ女性もスペイン人や黒人男性を助けるため金銭を盗む。この黒人男性はインディオ女性に「売春代だ」と言っている。こうして猥雑な行為が広がっていく。

第十五編 インディオの有力者（カシーケ・市長・書記官）

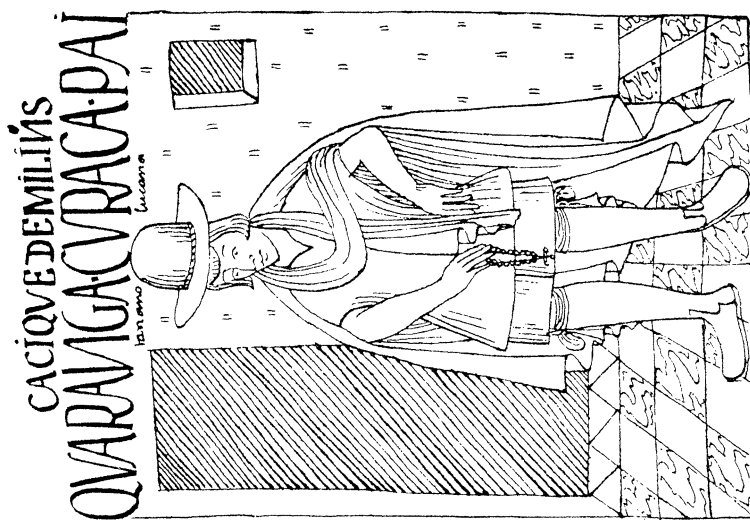


君主、カシーケ長官ドン・メルチョル・カルロス・インカサンティアゴの統治権を与えているスペイン国王と話すことができる。インカ帝国の法の下では、かれらの孫はみんなインカ王であり、スペイン国王のおかげで、インカ王の正当な子孫ということで、エンコンミエンダのインディオを統治できる。

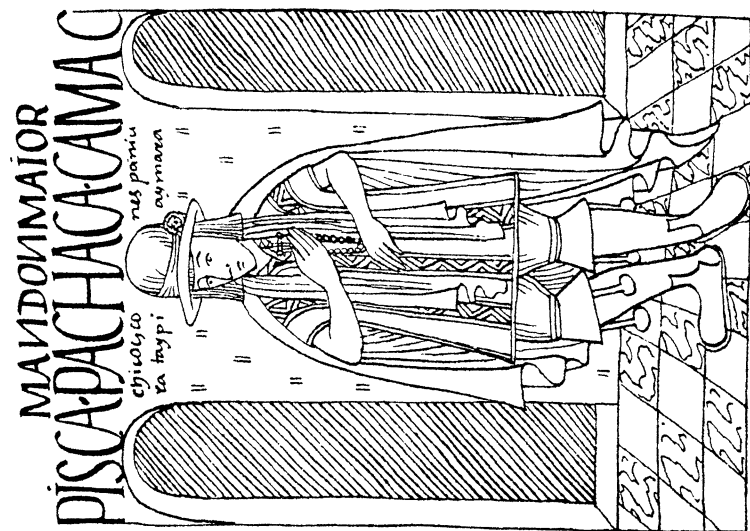


カシーケ副官

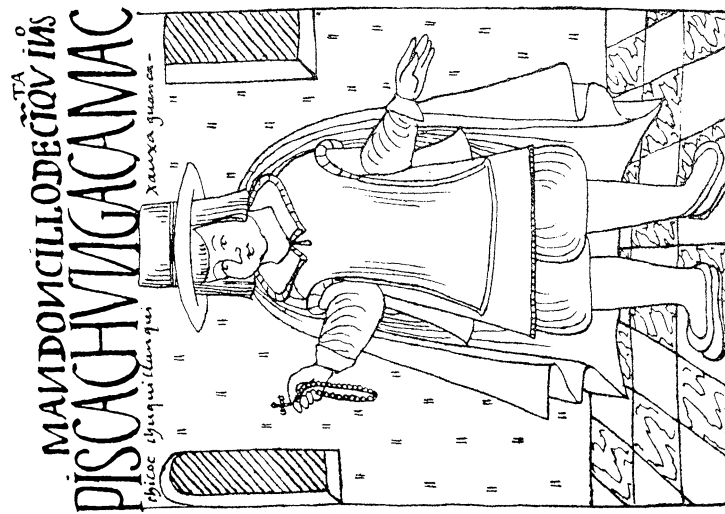
ドンという称号を与えられ、長官と同じ給与を貰える。彼らは紳士的で、この王国の法の下では長官に次ぐ副官である。彼らは、身分が分かるようにスペイン人と同じ身なりをし、剣を差し、馬にのる。カシーケ長官とは違って、きれいに髭を剃らなければならない。



1000 人の納税インディオを支配するカシーケ (酋長, クラカ)
皇帝からドンという称号が与えられ、酋長 (クラカ) であり、1000 人のインディオ貢納者の長である。彼らは尊敬されるべき存在だが、一人でもインディオがいないとなると、失脚させられる。行政区域で徴税を手伝い、カシーケ副官と見分けられるよう、帽子、首巻き、靴、マント、ベストを着用しなければならない。

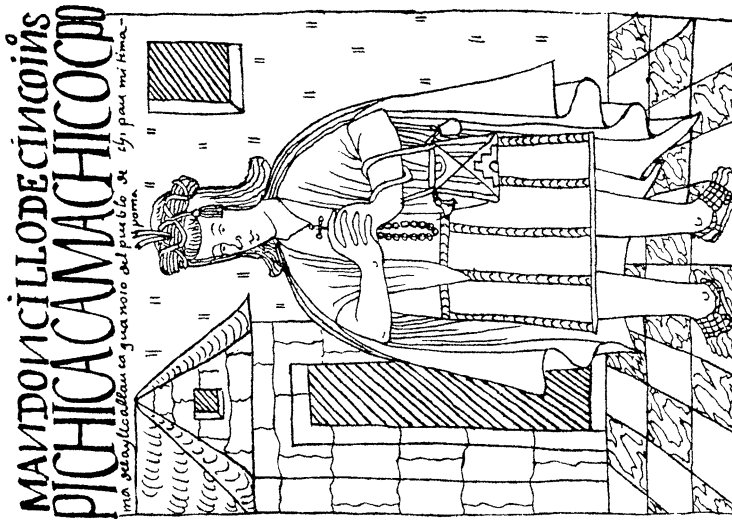


ドンという称号は与えられなかった。500 人の納税インディオを監督する。スペイン国王の命令に従って、行政区域で市長としての職務につき、またカシーケ長官に仕え、鉾山、広場、宿駅 (タンボ), 橋、インカ王道に労働者を送る責任がある。



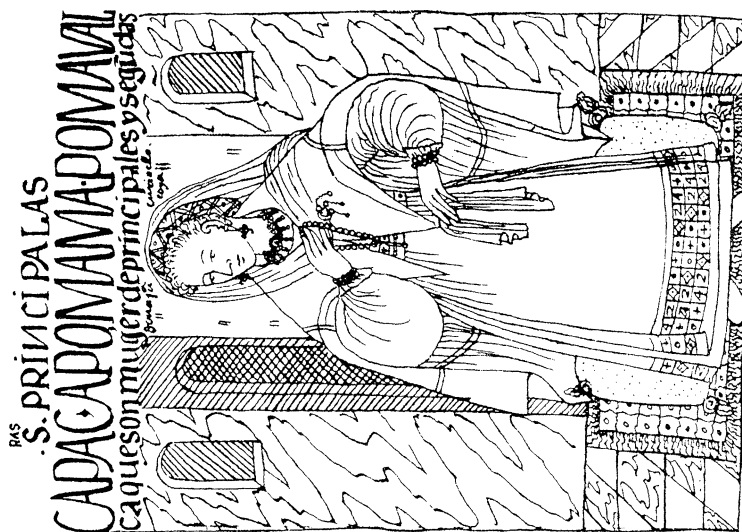
50人の納税インディオを支配するカシケ

行政区域の協議会で責任者として参加し、インディオにさまざまな仕事を提供する。カシケ長官に従わなければならない。徴税は重要な仕事の一つである。良きキリスト教徒であり、読み書きができなければならない。彼も家族も、浮気したり、遊びに興じたり、飲酒したり、騙したりしてはいけない。



5人の納税インディオを支配するカシケ

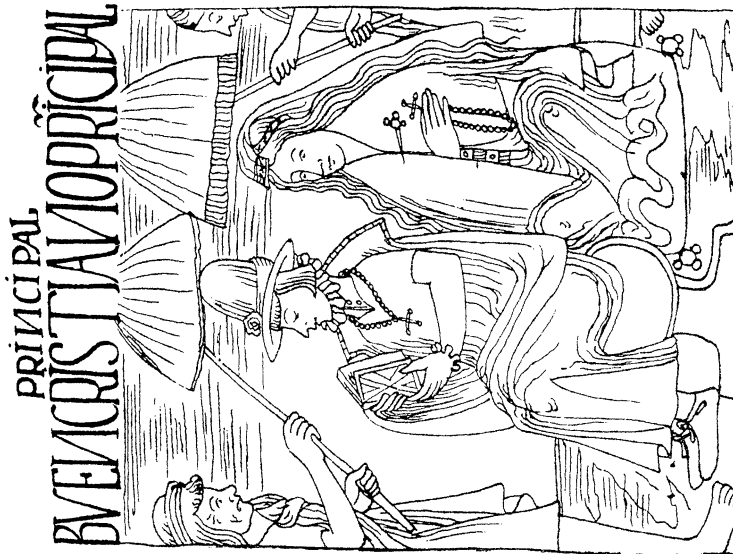
鉱山や大広場でカシケ長官の監督下で働く時、隊長として機能する。上官たちと区別できるように、インディオ様式の服を着る。哀れなインディオを侵害しようとして、自分たちは貴族であると言ったり、襟付きの上着やマントを羽織り、髭を生やしてカシケ長官と見間違われまいようにしなければならない。



この王国の偉大な女性、インカ皇女コヤインカ王の子孫で、カシーク長官やカシーク副官と結婚する。ドナ・フォナ・オクリヨ・コヤには台、クッション、靴があり、他のインディオとは異なっている。未亡人になったり、スペイン人や一般的なインディオ、あるいは黒人と再婚すると、皇女の地位を失うことになる。



カシークの妻、ドナ・フォナ・ワマン・チスクインカ帝国の妃や妻はナスタと呼ばれる。高い称号と利得を得ている。彼女たちや娘、姉妹が自分よりも身分の低い男性と結婚することはない。他のインディオとは違う装いなので、スペイン人が彼女たちのことを他のインディオや売春婦、メステイーン、黒人、ムラートと間違えることはない。社会的身分にふさわしくない衣服や宝石を身につける人々は罰せられなければならない。



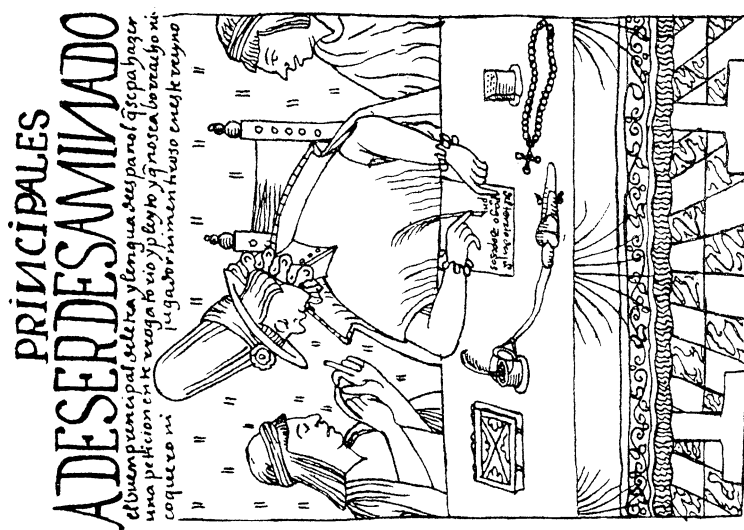
カシケー (首長) 長官

州の領袖とその妻は上官の命令に従わなければならない。よきキリスト教徒でなければならぬ。カシケー長官はコレヒドール(国王直属の地方官僚)、司祭、エンコメンデーロ(委託された人物)、スペイン人、市長らと交際する。労働報酬が支払われない貧しいインディオに対して、お互いに都合よく振る舞うためである。彼らは貧しいインディオの人々の共同体から提供された酒を飲み、ココヤや肉を食べる。



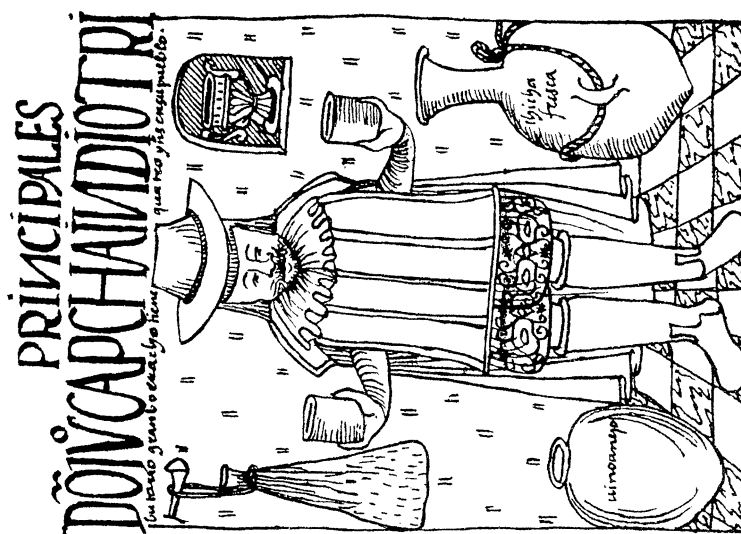
カシケー (首長) 長官

カシケー (首長) 副官は、金、銀、水銀鉱山や、町や村の公共の広場にインディオを運送する。カシケー副官はカシケー長官に労働者を提供しなければならず、王国中をまわって徴税の手助けをする。これが彼らの役目である。カシケー長官は概して怠け者の嘘つきで、受け取った税で酒を飲みココヤの葉を噛み、トランプやサイコロ遊びなどのスペインの遊びに興じる。酔っ払うと互いに殺し合い、貧しい人々から略奪する。



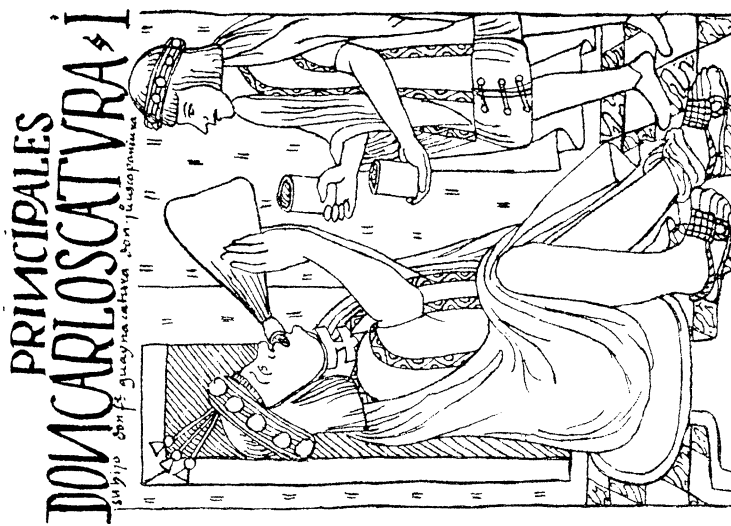
カシーケ (首長) 長官

カシーケ (首長) には試験があるが、スペイン語とケチュア語、さらにはラテン語も理解できる者もいた。カシーケは一般に、読み書きができるので、要求や質問を伝えることができ、インディオの抵抗的な論争を解決するのに役立つ。よきキリスト教徒で、慈愛に満ち博識で、人民と友好的であり、悪人には厳しく処罰すべきである。

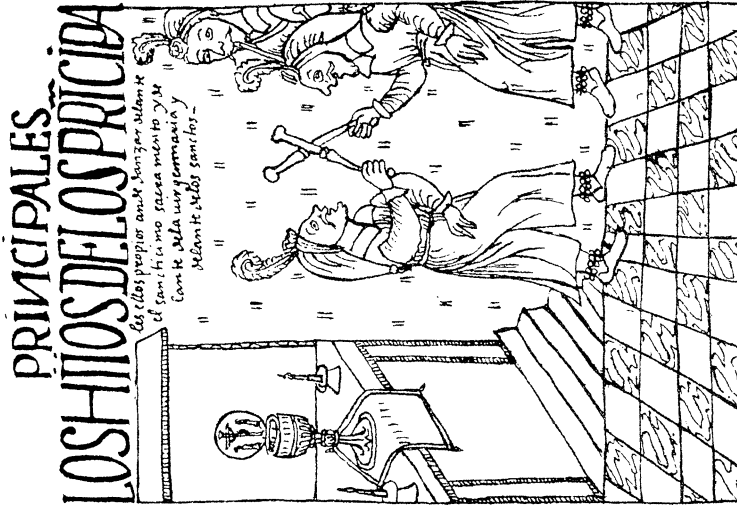


カシーケ (首長) 長官, ドン・ファン・カプチャ

彼はこの王国のインディオで、チチャやワインを飲む大酒飲みで、嘘つきである。キリスト教徒の敵であり、酒飲みや泥棒の味方である。スペイン人に会っては賄賂を贈るので、彼らから貴族と見なされ、スペイン王室に仕える者として認められるが、一日中酒を飲んで酔っ払っている。



カシーケ (首長) 長官、ドン・カルロス・カツラと息子、ドン・フェリベ
このカシーケ (首長) は、ドン・フアン・ローラとフアン・ヤナカと手を結んで
他の首長たちから徴収し、税を高くし、可能な限り二倍にまで上げる。賭け事や
酒、女に金を使い、墮落しエノコメデンデローに借金する。彼は徴税できないだけ
でなく、全てを酒につぎ込む。



カシーケ (首長) 長官

首長たちは、彼らの子どもやインディオの男女と一緒に、聖体、聖母マリア、聖
人の前で、スペインや黒人、インディオの踊りを踊る。キリスト教の様式に則っ
て執り行わないなら、罰せられるべきである。インカの時代には、統治者たちは
神殿や偶像、偽の神、悪魔の前で踊るよう命じたからである。今は、聖なる教会
に従って、真の神を敬まなければならない。



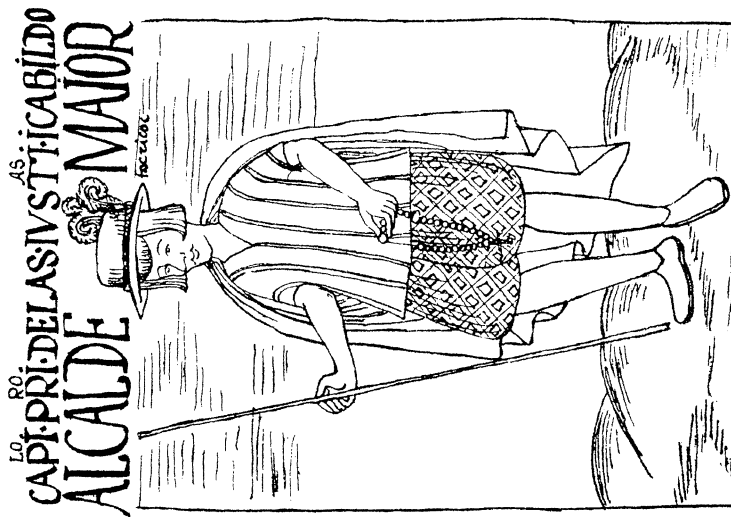
カシーク (首長) 長官

すべての人々が社会的地位に相応しい装いをすべきである。カシークはカシークらしく、カシークの妻も同様である。インディオはインディオらしく、インディオの妻はインディオの妻らしく装う。服装によって容易に判別できるし、それによって尊敬されもする。大酒飲みや遊び人は、着飾って、有力なカシークの身なりをしていても、尊敬はされないだろう。



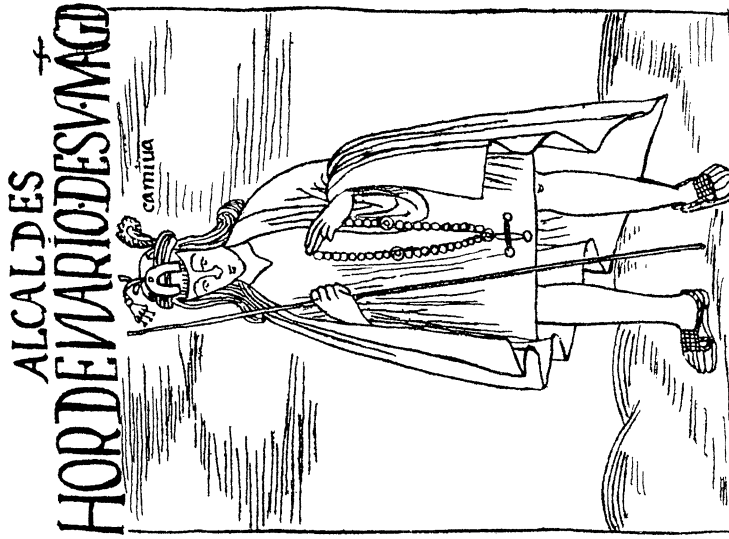
カシーク (首長) 長官

カシークがコレヒドールに贈り物を差し出すと、感謝するどころか、「どうして卿と半を差し出さないのか」と言う。カシークは「どうかこれをお受け取りください。これが私たちの持っているすべてなのです」と答える。



市長の長

市長は仕事に対して賃金や畑の作物をもらっている人々から選ばれる。ミタ労働の義務は免除されている。有能で読み書きができなければならず、500人の納税インディオを支配する者たちから選ばれる。市長には、カシーク（首長）長官の命令が実行されるようにする責任がある。



市長

管轄区域の村や町を訪問し、各家から提供される鶏一羽が俸給である。古代インディオの掟と同じ様に、キリストの掟とスペイン国王の定めた法に従わなければならぬ。訪問しながら、人々に家があるか、食料が不足していないか、調べる。特に樽に入っている食物は乾燥野菜やハーブと同様重要だった。容器、食卓食器類、鶏、豚、モルモット、唐辛子も貴重である。



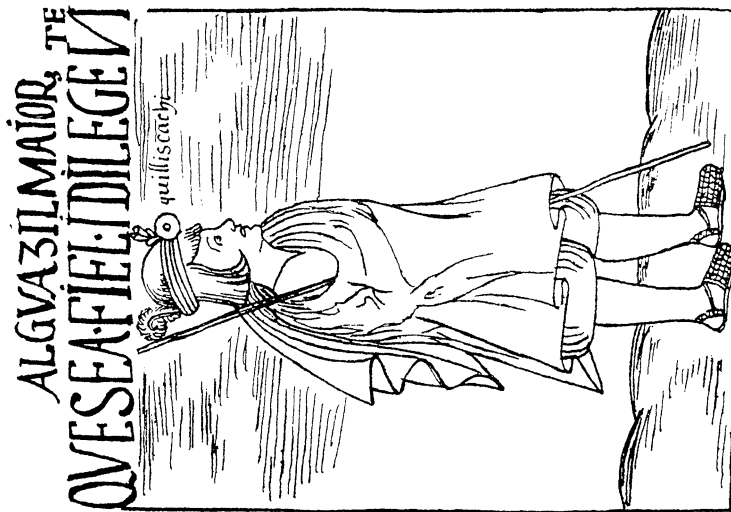
市長

卵2個、薪、薬草が見当たらないという理由で、司祭やエンコメンデーロ、スペイン人に罰せられる衰れた市長。神やスベイン国王の定めた裁きは完全に無視され、公然と罰せらる。貧しい人々をこのように罰しても、彼らは咎められないので、衰れた人々は逃げ出し、インディオの村は荒廃し、人口が減少する。

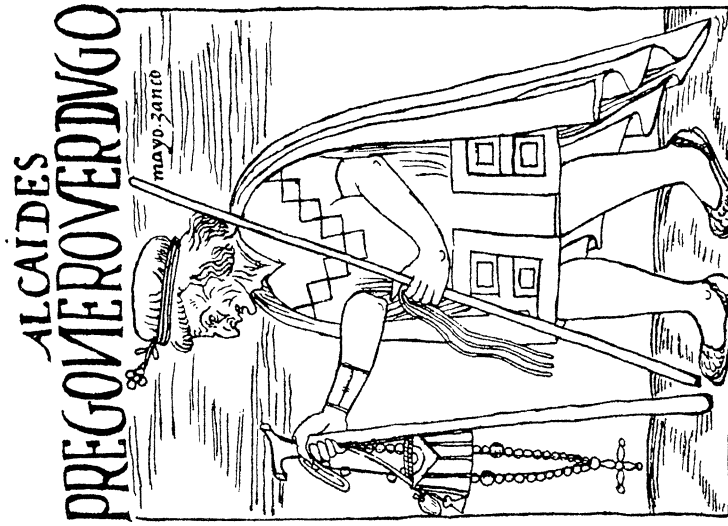


市会議員

半年ごとにインディオの家を訪れて、それぞれの家から俸給の兎一羽を手にする。市長と一緒にまわって、足りないものがないか、生まれながらの地位を守っているか、偶像を崇拜していないか確かめる。任務不履行の場合には、大広場で50回の鞭打ちに処され、髭を剃られ、州の行政官に支給される10ペソを罰金として払わされる。

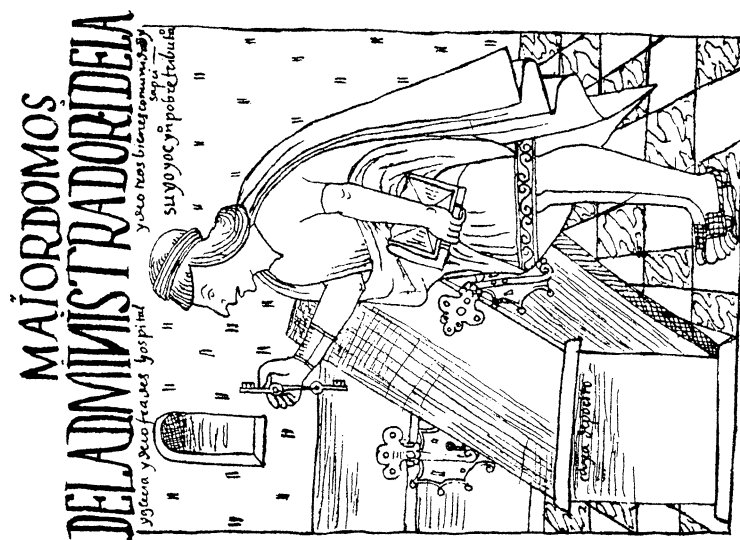


スペイン王国の法の執行者である保安官職務に手腕を発揮し、法を犯してはならない。半年ごとに畑をまわり、畑が耕し植え付けられているか、肥料を施されているか、畑や山、段々畑がきれいに保たれているか、確認する。トウモロコシやジャガイモ、その他の作物を調べる。食物を供給する農作業をしない者を罰する。

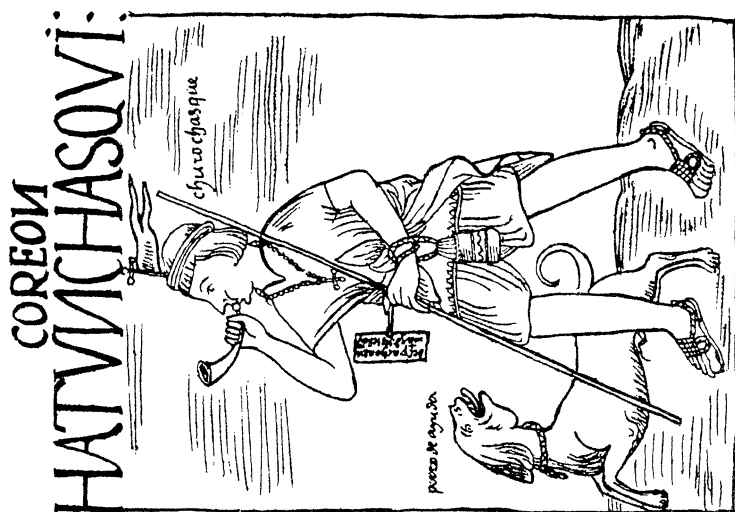


廷吏、市長、死刑執行人

彼らには、犯罪を犯した罪人から然るべき報酬が支払われる。こうした役人は、雷の神イラパの畑から責任能力のある人材を見つけ、野菜や果物の育つ畑を探さなければならぬ。この土地は、カシーケ長官の下で共同体や教会、親戚の畑で働く貧しいインディオに提供される。

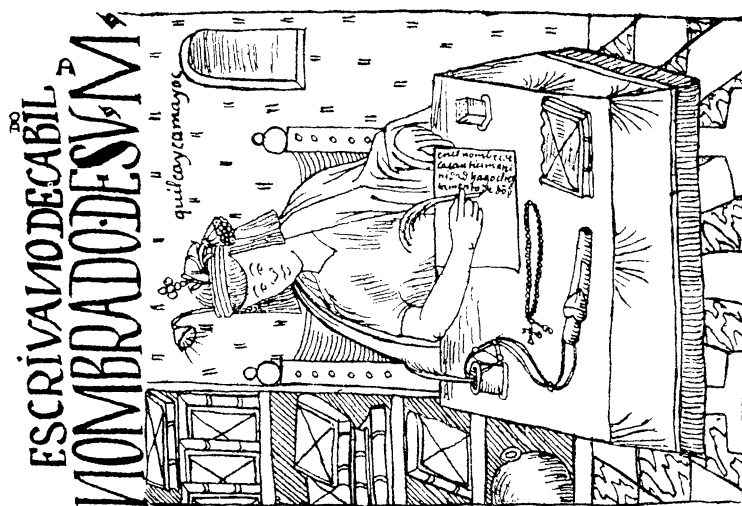


教会、組織、病院など共同体の所有物の管理人である執事
給与は税金から年間 12 パタコン支払われるか、それに相当する食べ物や家畜が
与えられる。こうして、彼らがトウモロコシや毛糸を盗まないようにしている。
仕事に忠誠心を持っていれば、一生仕事を続けるだろう。しかし、的確に仕事を
遂行しなければ、職を失うだろう。



飛脚 (チャスキ)

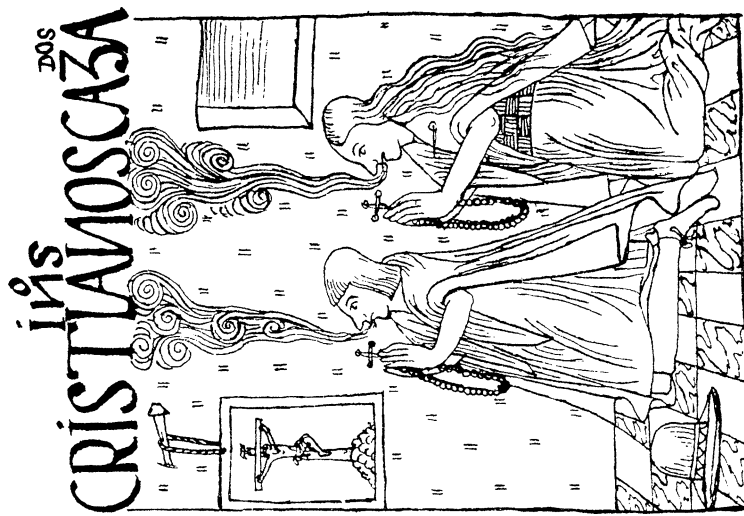
犬を連れて旅してまわり、十字架を身につけ、遠くからでも見えるように目印と
なる白い旗を頭につけている。また遠くからでも聞こえるラッパを持っているの
で、到着を知らせることができる。武器として棒を持っている。インカ帝国の時
代には、首長や貴族の息子がこの職務に就き、インカによって保護されていた。
今は、飛脚 (チャスキ) はスペイン王国の役人なので、賃金を受け取るべきであ
る。メッセージを伝えるためにペルー中のインカ道を旅するのである。



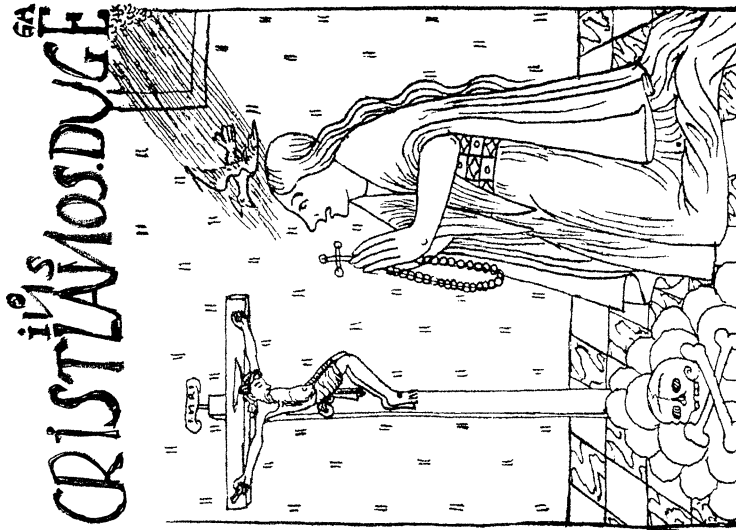
共同体の書記官、スペイン王国の役人

「聖トリニティーの名において、ドン・ペドロの遺書を書き記します」県の書記官は、地方行政官である有力カシケと居住すべきである。神と国王に仕える任務を遂行できるように、納税などの負担を免除された書記官が各村に任命されるべきである。どんな小さな村にも書記官を配属すべきである。そうすればその供述書が法的な証拠となる。

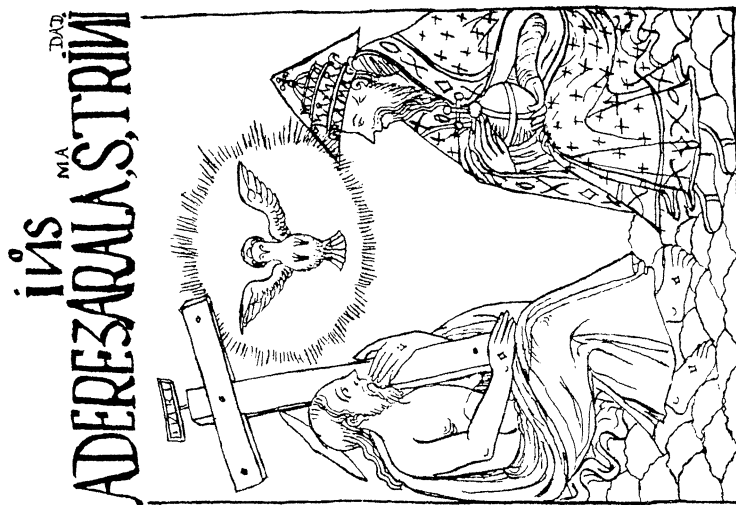
第十六編 キリスト教徒のインディオ



キリスト教徒のインディオ
この国のインディオの言動やキリスト教信仰は、司祭や政宗区の神父、コレヒドール、エンコメンデーロ、スペイン人たちのいない平穏な状況になれば、さらに発展するだろう。酷い待遇を受けなくなれば、よく教育された、すばらしいキリスト教徒になるだろう。インディオはだれにも頼らずによきキリスト教徒であることをすずで知っているのだ。



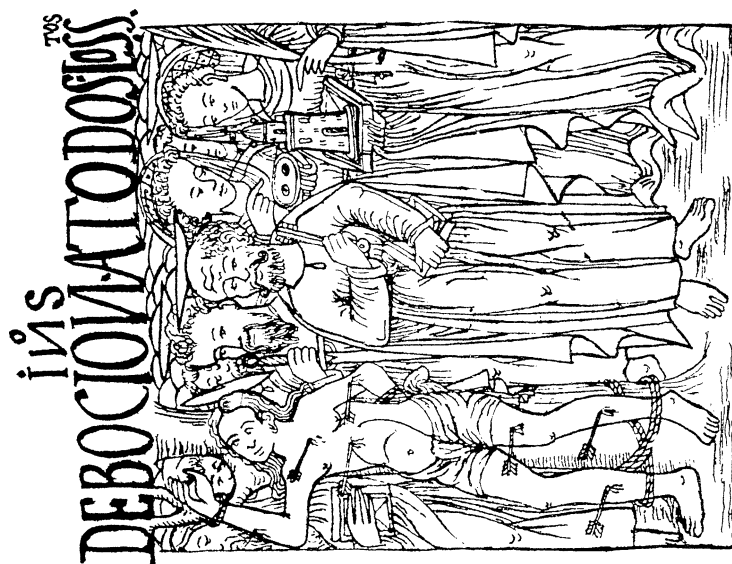
キリスト教徒のインディオ女性
とても敬虔で、読み書きや音楽、裁縫を習うために女子修道院へ行く。そこでスペイン人と同じように掃除や裁縫の仕方を習う。インディオ女性は、スペイン人女性が知っていることはすべて知っているし、男性よりも働き者で、賢明なキリスト教徒である。スペイン人がきちんと教えればよきキリスト教徒になるだろう。けれども間違っで教えられる。



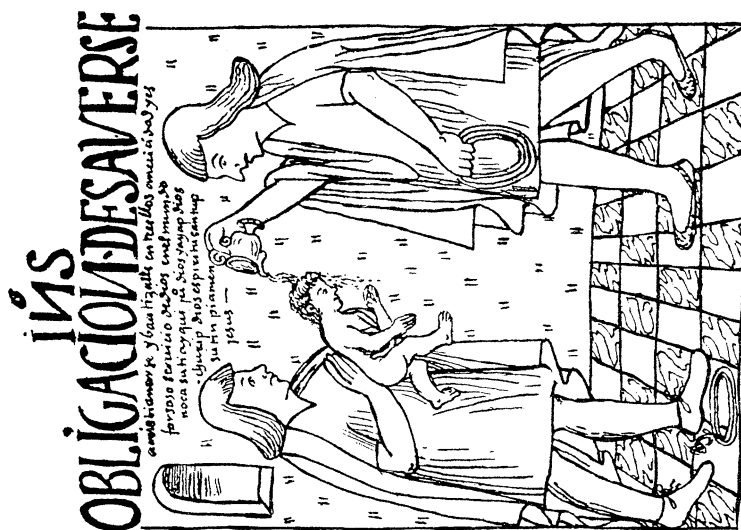
キリスト教徒のインディオ
主なる神に祈らなければならない。この王国のインディオは他に重要な仕事があっても、毎日ケチュア語で祈るべきである。まず三位一体にロザリオの半分を使い、それから天使祝詞を50回唱えて聖母マリアに祈る。つぎに主の祈りを5回、使徒信条を3回唱え、最後にこう唱える。「我らが神よ、悪い言葉をさやく人々の悪魔から、私たちの魂を守りたまえ。私たちが嫌悪している人たちから家族や財産をお守りください。」



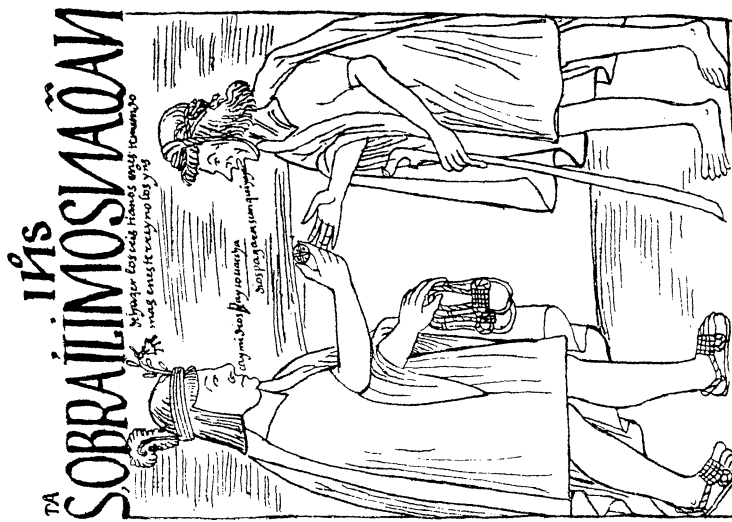
キリスト教徒のインディオ
聖母マリアにロザリオの半分を祈り、天使祝詞を50回、主の祈りを5回唱え、誘惑や病氣、突然の死、悪魔、論争や偽りの言葉からお守りくださいとお祈りする。この王国のインディオは、大広場や自宅で食事の前に、自分たちの言語で祈って、食事に感謝しなければならない。



キリスト教徒のインディオ
聖人と天使に捧げなければならない。悪魔から守られ祝福されるために、聖人、創始者、預言者、天使、大天使、智天使、福音伝道者、殉教者、贖罪司祭、修道士の全てに祈れば、天国で神に仕える聖人と天使から救済されるだろう。アーマン。

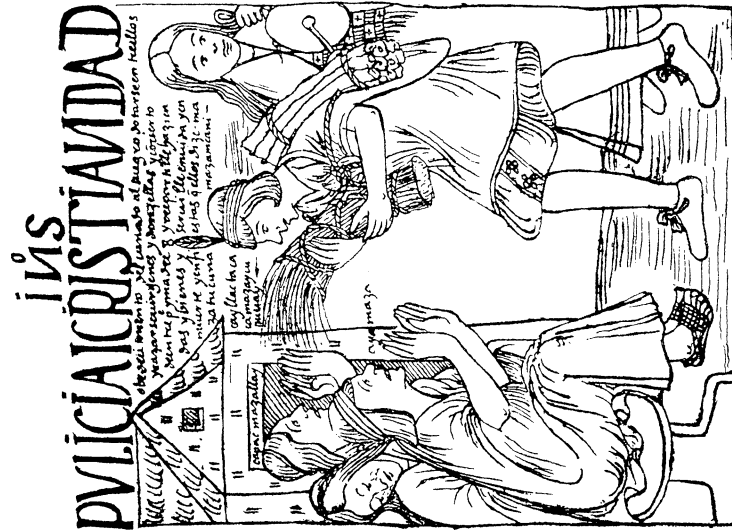


キリスト教徒のインディオ
キリスト教徒になるために、神への奉仕として欠かせない洗礼を受けなければならない。「父と子の聖霊の名において、この子ファンを洗礼する。アーマン」とインディオが言う。



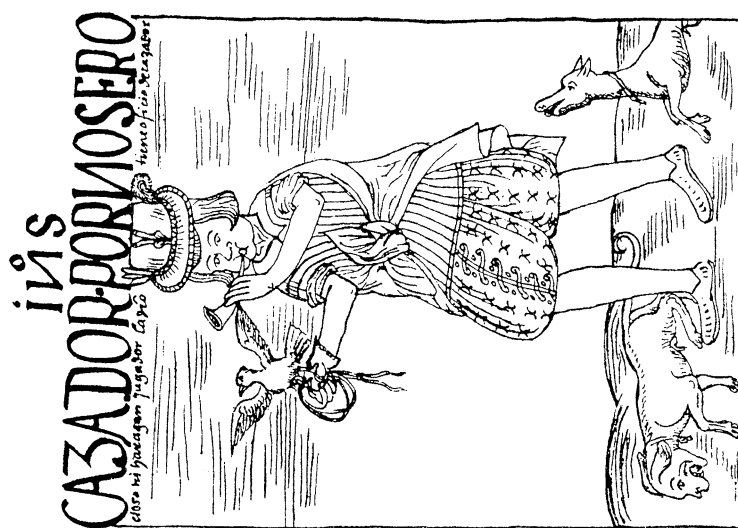
キリスト教徒のインディオ

互いに慈悲と慈善の行為がなされなければならない。「神の名において、貧しい人よ、これを受け取りなさい」と声をかける。彼らは老人、目の見えない人、手足の不自由な人たちを助ける。神が最初のインディオをこの世に送り出して以来の掟なのだ。必要な時には富める者も貧しい者も互いに助け合う隣人愛は、農作業に従事している共同体では当然のことである。



キリスト教徒のインディオ

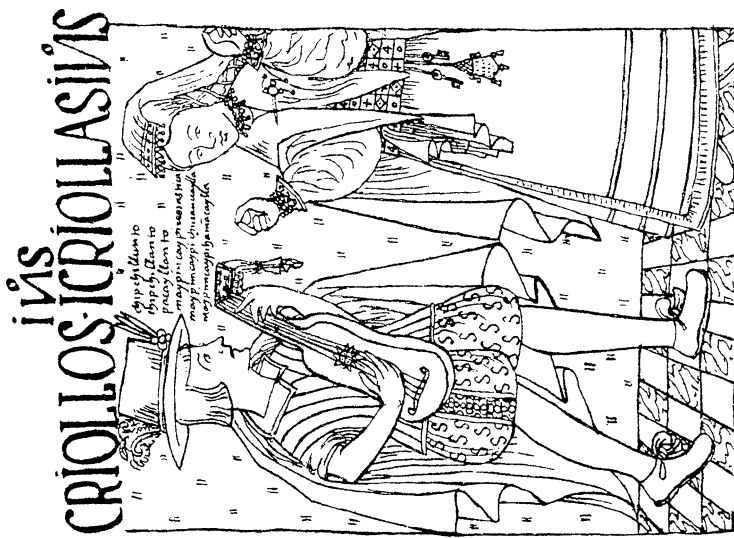
義理の父に喜んで従うインディオ男性。結婚する時には、両親の財産を分配される。こうして、法律上の兄弟になったという意味の「トゥクナ・マザム・カニ」という宴会を催す。



インディオの狩人

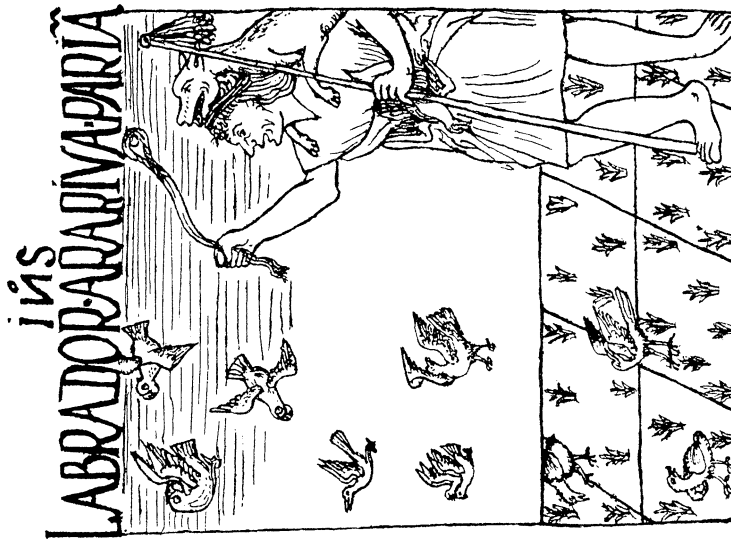
よく働き、怠け者でも、遊び人でも、泥棒でもない。インディオの狩人は、オウムや山岳地帯の鳥を捕まえるのに、鷹を用いる。彼らは優れた狩猟犬を繁殖し、ピクーナ、鹿、ラマ、山ヤギを狩る犬を育てる。猟犬グレーハウンドや牧羊犬、インカ犬も飼っている。猟では罟や仕掛けも用いる。

第十七編 植民地体制下のインディオ



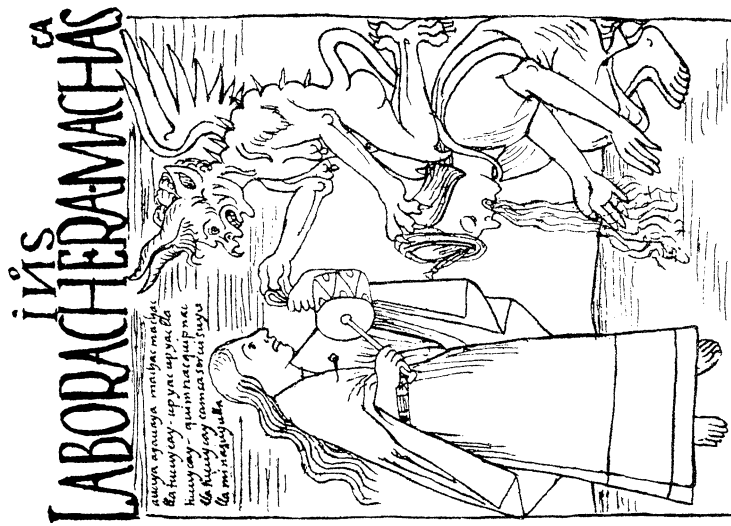
クリオーリーヨ (混血) のインディオ

宴会で歌っている。「輝けるはここにいるあなた、薔薇の枝、黄色い花の小枝にいるあなた。(愛の歌)」クレオール夫婦は若い使用人だが、急げ者の遊び人の泥棒になって、飲んで歌って宴に興じてばかりいる。

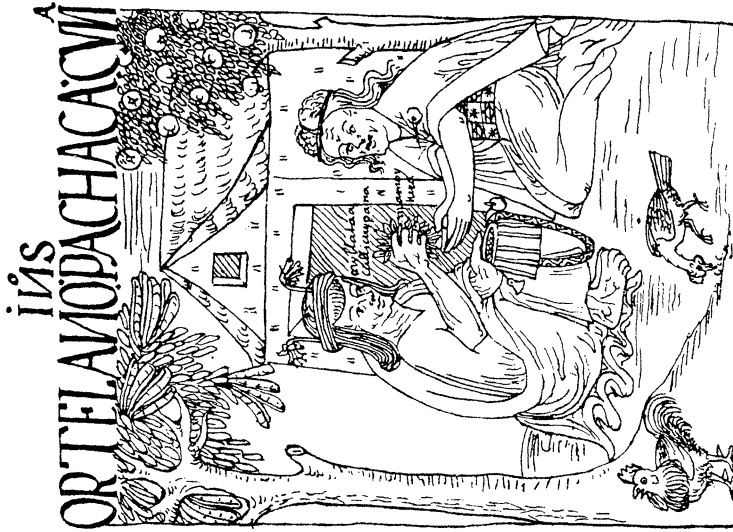


インディオの農民

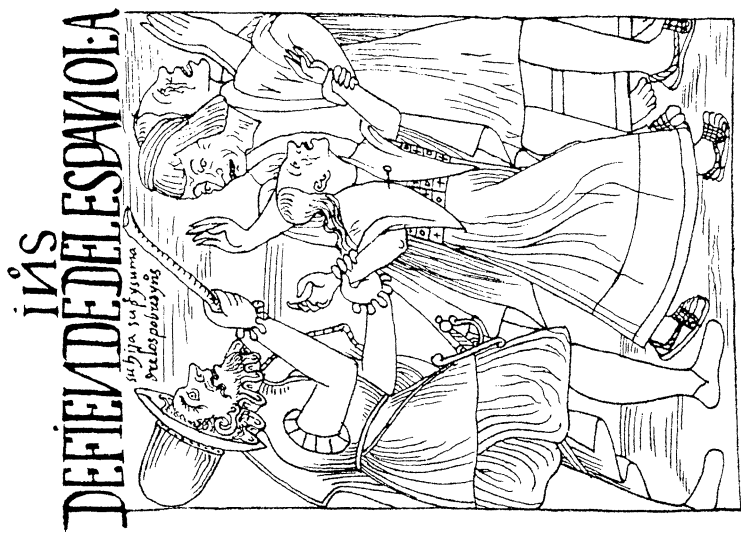
畑の手入れをしている。政府当局は農民を宗教の祭典や政策に携わらせろべきではない。そうすれば農民は夜明け前にミサに行ってしまうだろう。作物を荒らす鳥を追い払うために、農民は畑にいけない。畑を守り、作物の手入れができれば、食料が不足することはない。食糧や家畜、畑があれば、農民たちは神とスペイン王国に食べる食料があれば、村を捨てることがない。



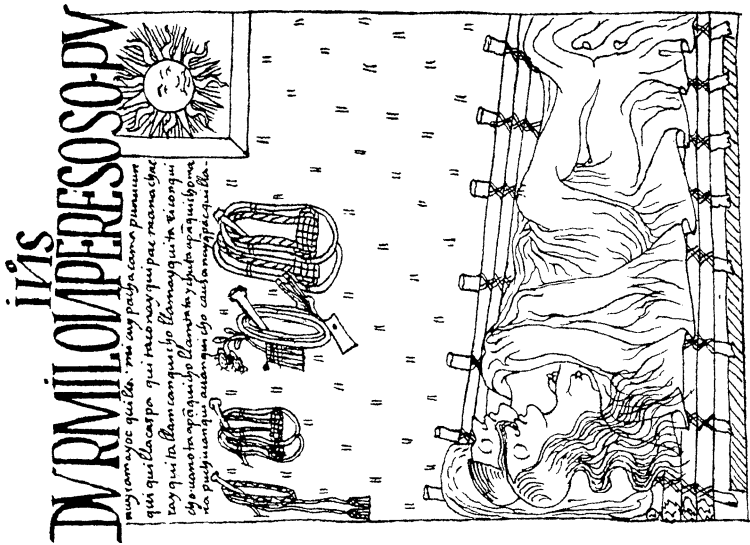
インディオ
読み書きができ、ロザリオを携え、スペイン人風の衣服に身を包み、聖人のように見えるキリスト教徒のインディオでさえ、酔っ払うと豹変し、悪魔に語りかけ、寺院や偶像、太陽を崇める。死人や病人を見守るために、先祖たちと同じように儀式を執り行う。また、最初の儀式として赤ん坊におむつをつける。



インディオ、コカの葉を噛む庭師。
庭師が妹に話しかける。「このコカの葉を噛んでごらん。」妹は答える。「私にも頂戴」インディオのチチャの飲酒とコカを噛むことを止めさせられる法律も罰則もないのは、誰も法律に注意を払わず、従う気もないからである。副王フランシスコ・デ・トレドとウルタド・デ・メンドーサはチチャの採取と、鉢や容器などの製造に必要な道具の使用を禁じた。けれども実際には、禁止することは不可能であることが証明された。



インディオ
横暴で欲情にかられたスペイン人から娘を守ろうとするインディオの両親。こう
いった出来事のせいで、インディオたちは村を捨て共同体を離れていく。コレヒ
ドール、書記官、司祭や神父、エンコメンデードーロや執事たちはインディオの女性
や子どもをさらう。



寝てばかりで怠惰なインディオ
屋まで寝ているのは、怠け者で、畑仕事をする気がないからである。ラマの世話
もせず、畑の手入れもせず、薪や糞、米もなく、生計を立てるのに必要なことは
何もしない、究極の怠け者！



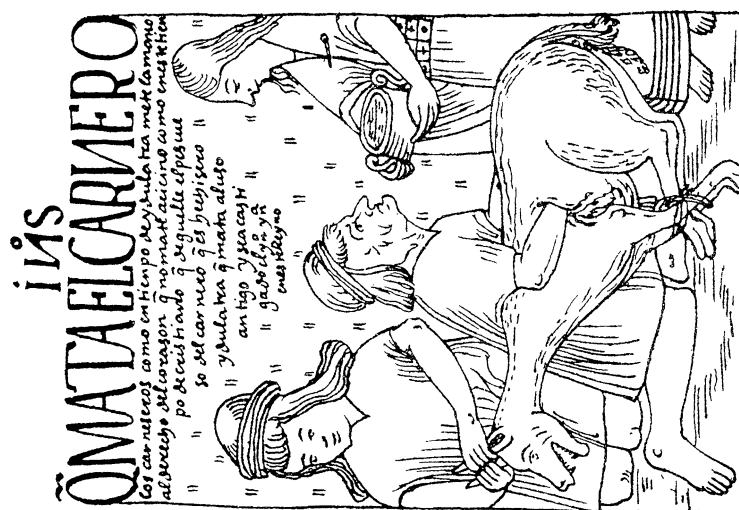
親を尊敬しないインディオ

「死ね、老いぼれ」と言って、棒で親を殴る。「お願いだから打つのをやめておくれ、私はおまえの父親だぞ。裁判官に報告するぞ。神の恐れを知らないなさい」この国のこうした人々は、神の戒律にも、父親を敬い助けるといふ先祖から続いてきた掟にも従わない。酷く殴り、ぞんざいな扱いをする。こうした状況は、彼らに教育が施されず、悪いことをしたときに罰せられなかったためである。両親に従わないような者は、神から罰が与えられるだろう。



老いたインディオ

役人が税として年老いたインディオからラマを取り上げた。「私は高齢なので、農作物の納税を免除されている一畑も家もラマも、両親や祖父母から引き継いだものだ」と年老いたインディオが言った。



インディオとラマ

この王国のインディオはラムを殺すという昔からの儀式をずっと行っている。宗教儀式のたま、また食料を得るためにラムを殺し、腹からその血を飲み、生の肉を煮くって偶像崇拝の伝統に則って心臓を開ける。そのラムは喉をかき切られて殺されるべきで、血や臓器いて、料理した肉を食べる。その規則に従わなければ、鞭打ち 50 回とせん断の罰を受ける。



インディオ、星占い師、詩人

インディオの賢人である星占い師は、種まきや収穫の時刻や月日を正確に知っている。ウチェクマルカ村出身のインディオの賢人、星占い師ホアン・ユンパは、星、太陽、月、彗星の動きを理解していた。このインディオの賢人は150歳を過ぎてからも非常に視力が良く、歯も完全にそろっていて、若者よりもよく食べた。非常に博学だったが、読み書きはできなかった。



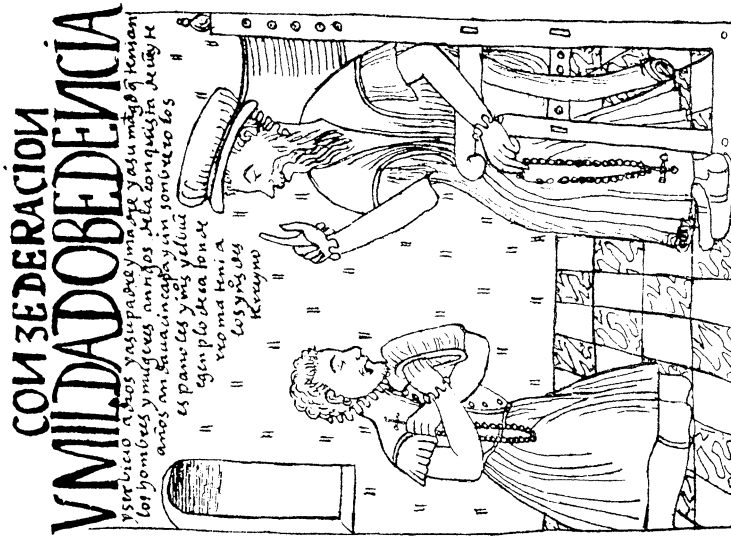
考察

キリスト教徒たちは自分自身の心と頭でよく考えるべきである。どのようにして神が、天国、地球、この世に生存するもの、魚や動物、蝶、カタツムリ、蟻、コロギ、蚊を創ったのか。神はまた父アダムと母イヴを創り、この最初の人間は神から大洪水の罰を受けた。ノアの方舟にのった動物と六人の結婚した息子たちだけが生き残った。神はノアの息子の一人をインディオの新世界に送った。スペイン人に似て肌の白い男性だった。



考察

この王国のインディオは、隣人に慈悲深く振る舞う。例えば、広場で食事をするときには、先祖代々の掟と神の御言葉に従って貧しい人々や病人、放浪者にも食事を与えらる。



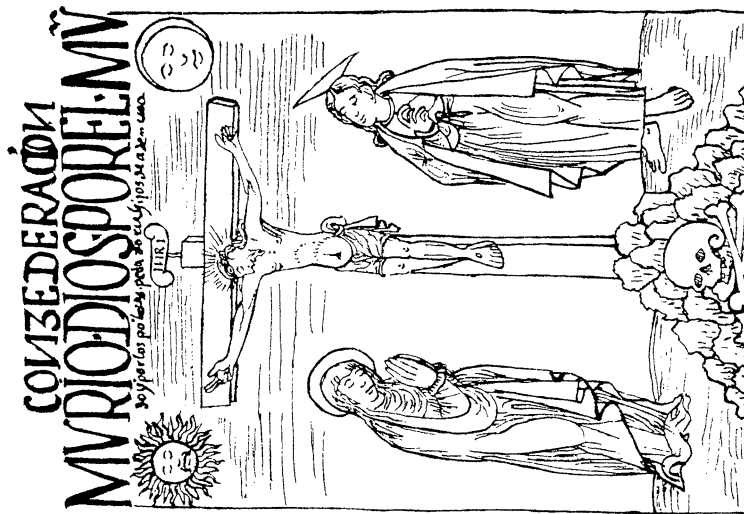
考察

年配の男女は、神や両親、スペイン国王に対して非常に謙虚で、従順である。スペイン人による征服から20年たった今、スペイン人もインディオも帽子やマントなしでは出歩かない。インディオはローマからやって来たカトローを良きお手本としてきた。



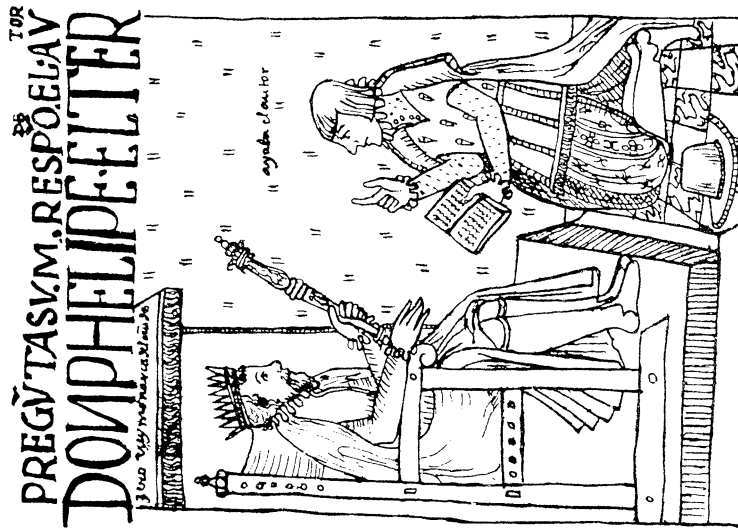
考察 泥棒の一生

人々に暴行する泥棒、遊び人、悪漢、そして黒人やスペイン人よりもたちの悪い噂つきがいる。カステイリャにいた時と同じように、この王国でも盗みを働く。インカ時代には家にはドアも鍵もなく、2本の棒で塞いでいただけだった。今ではスペイン人と同じように家に押し入り盗みを働くインディオが大勢いる。



考察

イエスはこの世の罪人のために亡くなった。イエス・キリストは世界と人類のために亡くなった。彼は生涯貧しく、迫害を受け続け、拷問を受けて殉教し、そこから生き返ったのだ。最後の審判によって、抑圧されてきた人々が救われ、罪深く反抗的で傲慢な人々は、嵐や炎、むち打ちなどの刑に処されるだろう。



スペイン国王フィリペ3世

国王陛下に「新しい記録と良き統治」を直接進呈した著者ワマン・ポマ・デ・アヤラに、尋ねている。ペルーで起きていることを知るために質問している。そうすれば、その地の統治制度を改善し、よりよい裁判制度をつくりあげることができると。この王国の貧しいインディオが苦しんでいる劣悪な労働問題をも解決すれば、再びインディオの人口は増加するだろう。



この本の著者、ワマン・ボマ・デ・アヤラ
息子のフランシスコ・デ・アヤラと一緒に歩いている。リマに向かっているところ
で、国王に記録を渡すためである。ほとんどの着の身着のままで冬の間歩き続
け、疲れてきた。頼りになる馬のガイドと、2匹の犬アミーゴとラウタロを連れ
ている。

(完)